からつ大学交流連携センターがおこなった「地域生活に関する唐津市民調査」の結果を報告する。

【調査概要】

本調査の概要を述べる。本調査の目的は、唐津市民の「ソーシャル・キャピタル」を把握することである。調査内容は、ソーシャル・キャピタルにかんする項目（人間関係（信頼関係・付き合いの程度・頻度）、地域参加）に加え、コミュニティ意識、権威主義的意識、ライフスタイル、市民生活の満足度、フェイス・シートである。調査時期は、2011 年 3 月 28 日から 4 月 11 日で、調査方法は郵送法を用いた。母集団は唐津市民で、調査対象は 20 歳以上 80 歳以下の市民とした。サンプリング方法は、ランダム・サンプリングで、2000 名を抽出した。回収数は 424、回収率は 21.2%であった。この回収率の低さは、当センターの知名度の問題や年度を跨いだことが理由として挙げられるだろう。

【調査概要】

1．調査の目的

唐津市民のコミュニティにかんする意識や地域社会への参加の実態を調べる。

2．調査内容

a. 人間関係（信頼関係、付き合いの頻度など）

b. 地域参加　　c. コミュニティ意識

d. 価値意識・ライフスタイル　　e. 権威主義的意識

f. 市民生活の満足度　　g. フェイス・シート

3．調査主体

からつ大学交流連携センター

4．調査時期

3 月 28 日～4 月 11 日

5．調査方法

郵送法

6．調査対象

対象：20 歳～80 歳の唐津市民

サンプリング：ランダム・サンプリング

7．調査配表数・有効回答率

配表数：2000 票

回収数：有効 424 票、無効 2 票

回収率：21.2%

【回答者属性】

性別をみてみると、女性の方が多くなっている。一般的にいうと、アンケートに回答する割合は女性の方が多い。本調査もその傾向が表れている。母集団と比べても、女性の割合が高くなっている。なお 3 月時点での人口における男女比率は、男性 47.1%、女性 52.9%であった。

年齢をみてみると、高齢者の割合が高くなっている。これもアンケート調査によく見られる傾向である。20 代が特に低くなっている。

回答者の居住地区の割合は表の通りである。母集団における人口比率と比較すると、呼子地区の割合が低くなっている。逆に厳木地区の割合が高くなっている[1]。七山地区と呼子地区での回答が少なくなっている[2]。

居住年数についてみると、40 年以上と答えた人の割合が一番多かった。30 年以上住み続けていると答えた人が 5 割となっているのは、回答者の年齢に偏りがあるからと考えられる。

回答者の属性

		度数	比率
性別	男性	179	42.2
	女性	238	56.1
	無回答	7	1.7
年齢	20 代	31	7.3
	30 代	54	12.7
	40 代	54	12.7
	50 代	83	19.6
	60 代	120	28.3
	70 代(80 歳含む)	73	17.2
	無回答	9	2.1
居住地域	唐津	257	60.6
	七山	10	2.4
	相知	28	6.6
	肥前	26	6.1
	呼子	8	1.9
	浜玉	36	8.5
	厳木	22	5.2
	北波多	16	3.8
	鎮西	20	4.7
	無回答	1	.2
居住年数	1 年未満	4	.9
	１～５年未満	32	7.5
	５～１０年未満	29	6.8
	１０～２０年未満	60	14.2
	２０～３０年未満	77	18.2
	３０～４０年未満	73	17.2
	４０年以上	142	33.5
	無回答	7	1.7

N=424

【分析にあたって】

ソーシャル・キャピタルの把握という目的で調査をおこなったが、ソーシャル・キャピタルの把握のまえに、やや細かに各質問項目を検討しておきたい。

はじめに、クロス表を中心に分析を進める。

[1] 3 月時点での各地区の人口比率は、唐津地区 60.1%、七山地区 1.8%、相知地区 6.5%、肥前地区 6.4%、呼子地区 4.2%、浜玉地区 8.5%、厳木地区 3.8%、北波多地区 3.7%、鎮西地区 5.0%。

[2] このようにサンプルにおいては偏りが出ている。

【信頼関係】

はじめに「信頼」にかんする質問項目からみていこう。問 1 から問 3 の結果をみてみよう（図 1）。

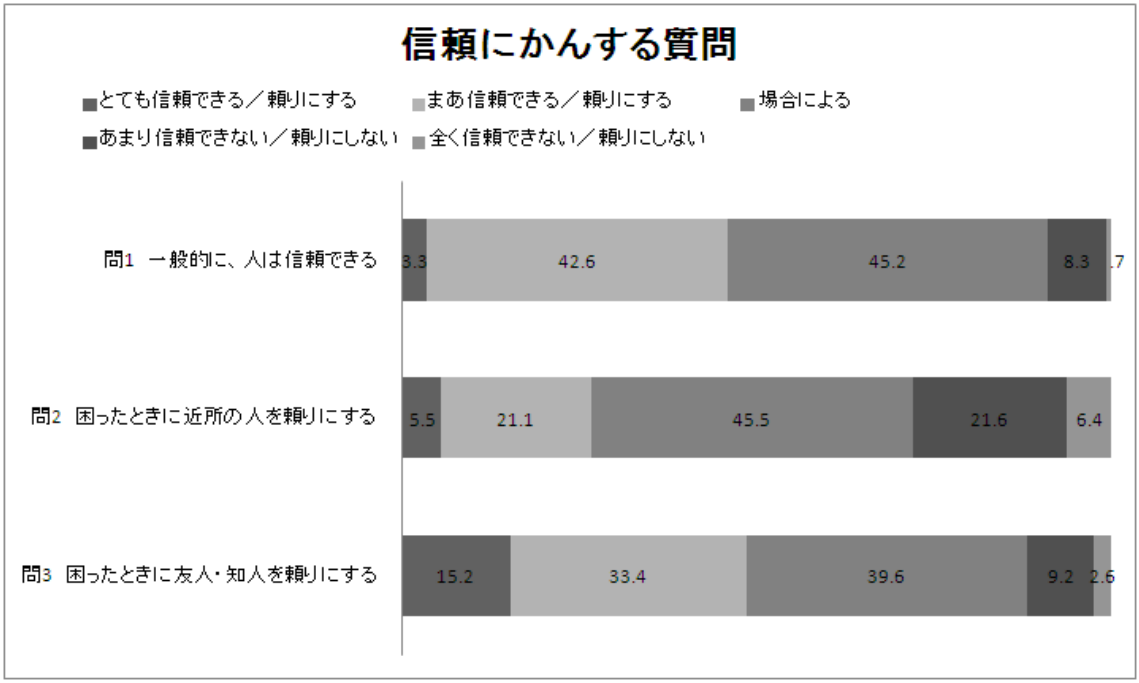

図 1

問 1 の結果をみると、「場合による」（45.2%）が最も多く、次に「まあ信頼できる」（42.6%）となっている。質問に「とても信頼できる」「まあ信頼できると」と肯定的に回答したのは、全体の 5 割弱であり、逆に「あまり信頼できない」「全く信頼できない」と否定的に回答したのは、全体の 1 割ぐらいであった。

問 2 の結果をみると、これも「場合による」（45.5%）がもっとも多い。質問にたいして肯定的に回答したのは、全体の 3 割弱程度であった。

問 3 の結果をみると、問 2 の回答と比較すると、肯定的意見の比率が高くなっており、5 割近くとなっている。逆に頼りにしないと否定的な回答をしたのは、全体の 1 割程度であった。

これから、これらの質問について細かく分析していく。分析する際、分かりやすくするために、「とても信頼できる／頼りにする」「まあ信頼できる／頼りにする」を「信頼する」／「頼りにする」とグループ化し、「あまり信頼できない／頼りにしない」「全く信頼しない／頼りにしない」を「信頼しない」／「頼りにしない」とグループ化した。そして、「性別」、50 歳で前後に区別した「年代」、旧唐津（唐津地区）と旧町村（唐津地区以外）とで区別した「居住地区」、職業別で区分した「職業」、こうした属性によって回答傾向が異なっているかどうかを調べた。

なお、図の右側に示されている記号や数字について、簡単に説明しておこう。これらのものは、アンケートの結果から、母集団（ここでは唐津市民）において、属性によって回答の傾向が異なっているかどうかを統計的に示したものである。確認すればよいのは、「p」

のところだ。この p が、「p=n.s」の場合、その層にある属性によって、回答傾向に違いはないということを意味している。例えば、男性と女性で回答の傾向は違わない（性別は回答のありかたに影響を与えていない）ということを意味している。この場合、「有意差はない」というように記される。「p<.05」、「p<.01」の場合、それぞれ 95%、99%の確率で、属性によって回答傾向が異なっているということを意味している。例えば、男性と女性で回答の傾向が異なる（性別が回答のありかたに影響を与えている）ということを意味している。この場合、「5%水準で有意」とか「有意差がある」というように記される。なお、表の下に示される数字や記号も同じである。

◆【問 1】「一般的に、人を信頼しますか」

それでは、一般的に人を信頼するかという質問について、みてみよう。

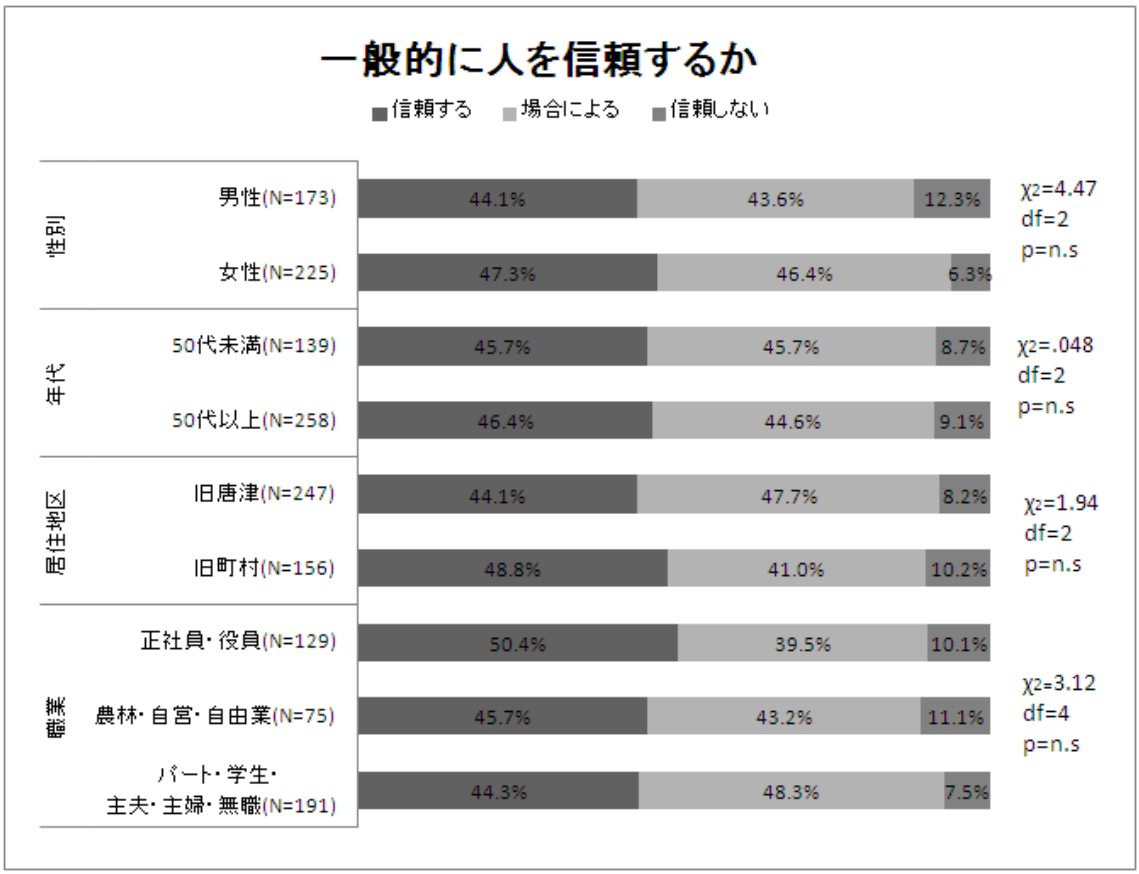

図 2

「人を信頼できるか」という質問について、属性とのクロス表を作成したが、図の通り大きな違いはなかった。

参考に 2007 年の日本総研の結果を示しておく（表 1）。その調査では、一般的な信頼についての選択肢は、「ほとんどの人は信頼できる」、(「ほとんどの人は信頼できる」と「注意するに越したことはない」の)「中間」、「注意するに越したことはない」、「分からない」の四択であった。

表１　性別×人は信頼できる

	1.ほとんどの人は信頼できる	2. 1 と 3 の中間	3.注意するに越したことはない	4.分からない
男性	10.1%	48.1%	41.2%	0.7%
女性	8.9%	54.1%	35.7%	1.3%

日本総研（2008）より作成

◆【問 2】「困ったときに、ご近所の人を頼りにしますか」

困ったときにご近所の人を頼りにするかという質問についてみてみよう。同様に、各属性とのクロス表を作成した。結果は図の通り（図 3)。

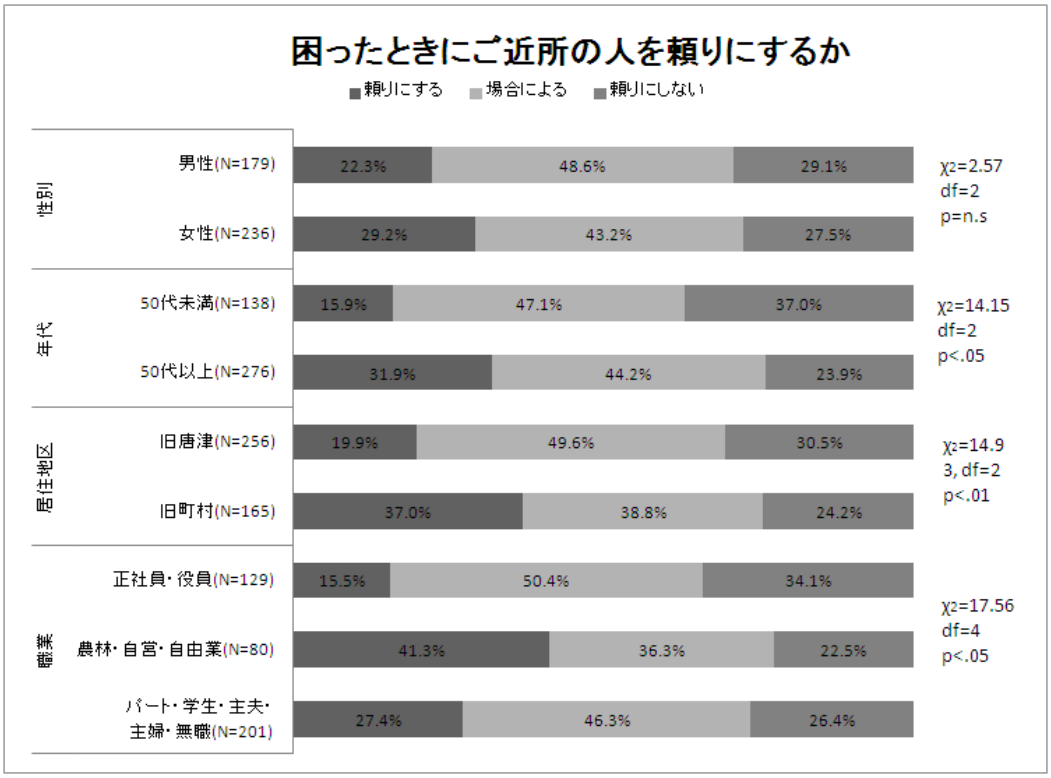

図 3

有意差がみられるのは、年代、居住地区、職業であった。

年代についていえば、「頼りにする」と答えたのは、50 歳以上の世代のほうが多い。これは、若い世代よりそうでない世代の方が、ご近所付き合いが多いからということが考えられる。居住地区についてみてみると、「頼りにする」と答えたのは、旧町村のほうが多い。これは、都市化された旧唐津より、旧市町村のほうが地縁的な結び付きがいまだに強いと考えられる。職業についていえば、「頼りにする」と答えたのは、農林・自営・自由業の人たちが多かった。やはり農林業を営んでいる人や自営業の人では、近所の人の協力なしでは仕事をやっていけないということなのだろう。正社員・役員が「頼りにする」と答えた

割合が一番小さかった。

この質問については、年代の影響というよりも、どれくらい住み続けているのかという居住年数のほうが影響を与えていると考えられる。この点を調べるために、年代で層別し、居住年数が 10 年未満と 10 年以上の二つのグループに分け、多重クロス表を作成した（表 2）。

表 2　年代×居住年数×問 2 のクロス表

				近所の人を頼りにする			
年齢(2 区分)				頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
50 歳未満	居住年数	10 年未満	度数	4	17	24	45
			%	8.9%	37.8%	53.3%	100.0%
		10 年以上	度数	18	48	27	93
			%	19.4%	51.6%	29.0%	100.0%
	合計		度数	22	65	51	138
			%	15.9%	47.1%	37.0%	100.0%
50 歳以上	居住年数	10 年未満	度数	5	8	7	20
			%	25.0%	40.0%	35.0%	100.0%
		10 年以上	度数	82	114	59	255
			%	32.2%	44.7%	23.1%	100.0%
	合計		度数	87	122	66	275
			%	31.6%	44.4%	24.0%	100.0%

50 歳未満：$\chi 2=8.16$, df=1, $p<.05$ ／ 50 歳以上：$\chi 2=1.48$, df=2, p=n.s

このクロス表をみると、50 歳未満で居住年数が 10 年未満の人たちの半数以上の人が、近所の人を頼りにしないと答えている。逆に、頼りにしていると答えた人の割合は 10%弱であった。50 歳以上で居住年数が 10 年以上の人たちの回答の傾向をみると、頼りにすると答えたのは約 20%、頼りにしないと答えたのは約 30%であった。χ 二乗検定の結果は、5%水準で有意であった。50 歳以下では、居住年数が近所の人を頼りにするということにたいして、影響を与えている。

一方、50 代以上で居住年数が 10 年未満の人たちの回答傾向をみると、頼りにすると答えたのは 25%、頼りにしないは 35%であった。50 代以上で居住年数が 10 年以上の人たちの回答傾向をみると、頼りにすると答えたのは 32.2%、頼りにしないと答えたのは 23.1%であった。χ 二乗検定の結果は、有意でなかった。50 歳以上の人たちのなかでは、居住年数は近所の人を頼りにすることにたいして影響を与えていないようである。まとめると、50 歳未満の世代で居住年数が 10 年未満の人たちは、同じ世代で居住年数が 10 年以上の人たちと比べると、近所の人を頼りにしない傾向にあり、そして 50 歳以上の世代となると居住年数が近所の人を頼りにするかどうかについて影響を与えていない。

また、居住地区による違いがある可能性があるので、居住地域（旧唐津と旧町村）で層別し、年代とのクロス表を作成した。結果は以下の通り（表 3）。

表 3　居住地域×年代×問 2 のクロス表

居住地域				近所の人を信頼する 頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
旧唐津	年齢 (2 区分)	50 歳未満	度数	13	46	31	90
			%	14.4%	51.1%	34.4%	100%
		50 歳以上	度数	38	80	47	165
			%	23.0%	48.5%	28.5%	100%
	合計		度数	51	126	78	255
			%	20.0%	49.4%	30.6%	100%
旧町村	年齢 (2 区分)	50 歳未満	度数	9	19	20	48
			%	18.8%	39.6%	41.7%	100%
		50 歳以上	度数	50	42	19	111
			%	45.0%	37.8%	17.1%	100%
	合計		度数	59	61	39	159
			%	37.1%	38.4%	24.5%	100%

旧唐津：$\chi 2=2.90$, df=2, p=n.s ／ 旧町村：$\chi 2=14.50$, df=2, p<.01

旧唐津居住においては、年代による違いはみられない。一方旧町村居住に住んでいる、50 歳未満の世代とそれ以上の世代では、大きな違いがみられた。旧町村の 50 歳未満の世代において、近所の人を頼りにすると答えたのは 18.8%で、この数字は旧唐津居住の人たちと同じぐらいである。旧町村居住の 50 歳以上の世代において、近所の人を頼りにすると回答した人の比率が最も高く、逆に 50 歳未満の世代において、頼りにしないと回答した人の比率（41.7%）が最も高かった。このような結果からすると、旧町村において、近所同士の協力関係が徐々に希薄になりつつあるといえるのかもしれない。

なお、居住地区で層別して、性別の違いをみてみた。表は示さないが、簡単な結果だけを紹介すると、頼りにすると答えた比率が最も高かったのは、「旧町村居住の女性」の 45.6%であった。他のグループはおおよそ約 2 割であり、頼りにしないと回答したのはおおよそ 3 割程度であっ

表 4　問 9×問 2 のクロス表

			近所の人を頼りにする 頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
地縁活動	活動している	度数	67	90	28	185
		%	36.2%	48.6%	15.1%	100%
	活動していない	度数	45	102	90	237
		%	19.0%	43.0%	38.0%	100%
合計		度数	112	192	118	422
		%	26.5%	45.5%	28.0%	100%

$\chi 2=31.72$, df=2, p<.01

た。

また、この質問にかんしては、「地縁活動」と関係が深いと考えられる。問 9 で地縁活動をおこなっているかどうかを聞いている。問 9 とのクロス表を示すと表 4 のようになる。

結果をみると、「活動している」と回答した人のなかで、36.2%の人が近所の人を「頼りにする」回答し、逆に「頼りにしない」と回答したのは 15.1%であった。一方、「活動していない」と回答した人のなかで、19.0%の人が近所の人を「頼りにする」と回答し、38.0%の人が「頼りにしない」と回答している。検定結果は、1%水準で有意だった。地縁活動をおこなっている人たちのほうが、地縁活動をおこなっていない人たちと比べて、近所の人を頼りにするようである。やはり、自治会などの活動は、地域の繋がりの強さを形成しているといえる。

また、問 4 で「近所の方とどのようなお付き合いをされていますか」ということを聞いた。選択肢は、「お互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活の面で協力しあっているひともいる」「日常的に立ち話をする程度の付き合いは、している」「あいさつ程度の最小限のつきあいしかしていない」「付き合いはまったくしていない」とした。近所の人を信頼するかどうかは、こうした近所の人との付き合いかたと関係しているとも考えられる。それを確かめるために、問 4 とのクロス表を作成した（表 5）。ここでは、問 4 の選択肢については、「あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない」「付き合いはまったくしていない」を統合している。

表 5　問 4 と問 2 のクロス表

			近所の人を			
			頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
近所づきあい	生活面で協力している	度数	47	31	3	81
		%	58.0%	38.3%	3.7%	100%
	立ち話をする程度	度数	55	102	36	193
		%	28.5%	52.8%	18.7%	100%
	最小限のつきあい・つきあいはない	度数	10	57	78	145
		%	6.9%	39.3%	53.8%	100%
合計		度数	112	190	117	419
		%	26.7%	45.3%	27.9%	100.0%

$\chi 2=113.40$, df=4, V=.368, $p<.01$

問 4 について生活面で協力していると回答した人のなかで、58.0%の人が近所の人を頼りにすると回答し、立ち話をする程度と回答した人のなかでは 28.5%、最小限度・付き合いはしていないと回答した人のなかでは 6.9%の人が、近所の人を頼りにすると回答している。このように近所づきあいの程度が弱くなるに従って、頼りにすると回答した割合も減少する。逆に「頼りにしない」の列をみると、近所づきあいの程度が強くなるにつれて、その割合が減少している。左上から右下に対角線でセルをみると、関連性が深いと予想さ

れる。関連性を示す Cramer の値は、V=0.368（p<.01）で、やはり関連性はありそうである。

この結果と先の地縁活動にかんする結果を併せて考えると、日常的な付き合いの程度が近所の人を頼るかどうかに影響を与えていると考えられる。

◆【問 3】「困ったときに、友人・知人を頼りにしますか」

困ったときに、友人・知人を頼りにするかについてみてみよう。先の質問項目と比較してみると、全体的にいえば、困ったときは近所の人よりも、友人や知人を頼りにするようである。

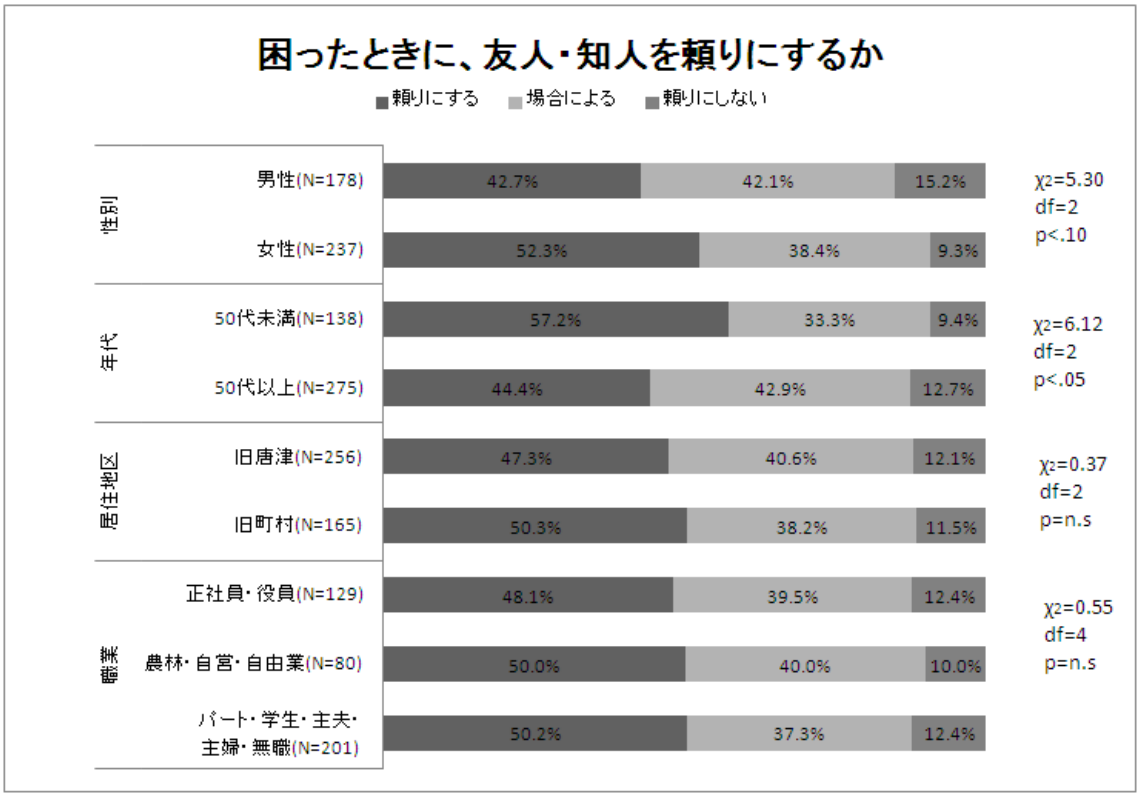

図 4

この質問について、有意差がみられたのは、年代であった。先の質問とは逆に、若い世代では困ったときに、近所の人より友人や知人を頼りにする傾向があることが示されている。また、性別で 10%水準であるが、有意差がみられる。他のものには、有意差がみられなかった。

この問いについて、男女を別にしてそれぞれ年代別でクロス表を作成した（表 6）。

まず男性をみてみよう。50 歳未満の男性においては、頼りにすると答えたのは 46.4%、頼りにしないと答えたのは 12.5%。50 歳以上では、頼りにするとこたえたのは 41.0%、頼りにしないとこたえたのは 16.4%だった。χ 二乗検定の結果は、有意ではなかった。男性においては、年齢は影響を与えていないようである。

一方女性をみてみると、50 歳未満では、頼りにすると答えたのは 64.6%、頼りにしないと答えたのは 7.3%。50 歳以上の女性では、頼りにすると答えたのは 46.7%、頼りにし

ないと答えたのは 9.9%であった。χ 二乗検定の結果は、5%水準で有意であった。女性においては、50 才以下の女性はそうでない女性と比べると、友人・知人を頼りにする傾向がある。参考に先に質問について、女性の年代別の回答のクロス表を示しておく（表 7）。

表 6　性別×年代×問 3 のクロス表

				友人・知人を頼りにするか			
性別				頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
男性	年代	50 歳未満	度数	26	23	7	56
			%	46.4%	41.1%	12.5%	100.0%
		50 歳以上	度数	50	52	20	122
			%	41.0%	42.6%	16.4%	100.0%
	合計		度数	22	76	75	27
			%	15.9%	42.7%	42.1%	15.2%
女性	年代	50 歳未満	度数	53	23	6	82
			%	64.6%	28.0%	7.3%	100.0%
		50 歳以上	度数	71	66	15	152
			%	46.7%	43.4%	9.9%	100.0%
	合計		度数	87	124	89	21
			%	31.6%	53.0%	38.0%	9.0%

男性：$\chi 2=0.67$, df=2, p=n.s ／ 50 歳以上：$\chi 2=6.93$, df=2, $p<.05$

表 7　女性年代×問 2 のクロス表

			近所の人を			
			頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
女性	50 歳未満	度数	15	37	30	82
		%	18.3%	45.1%	36.6%	100.0%
	50 歳以上	度数	54	63	35	152
		%	35.5%	41.4%	23.0%	100.0%
	合計	度数	69	100	65	234
		%	29.5%	42.7%	27.8%	100.0%

$\chi 2=9.06$, df=2, $p<.05$

こうした結果からすると、全体的には、困ったときには、近所の人を頼るのではなく、友人・知人のほうに頼る傾向がある。しかし、男女・年代別にみてみると、特に女性において年齢によって違いがみられる。違いが明らかになるように、問 2、問 3 の一部の回答について可視化してみた。

男性も女性も、年代が上がるに従い、近所の人を頼りにすると回答した人が増え、逆に友人・知人を頼りにすると答えた人が減少している。特徴的なのは、友人を頼りにするに

関して男性と女性とを比べると、男性の方がなだらかに減少しているのに対して、女性の方がその傾きが急になっているということである。多少強引な解釈となるが、多くの 50 歳未満の世代の女性において、友人・知人という存在は困ったときに頼りにする近しい存在となっている。一方、50 歳以上の女性では、おそらく物理的な距離などの問題があって、困ったときも友人・知人になかなか頼りづらくなるなっているのではないかということが考えられる。しかしそれでも、困ったときに頼りにするのは、50 歳以上の世代の男女共々友人や知人のほうが多いようである。

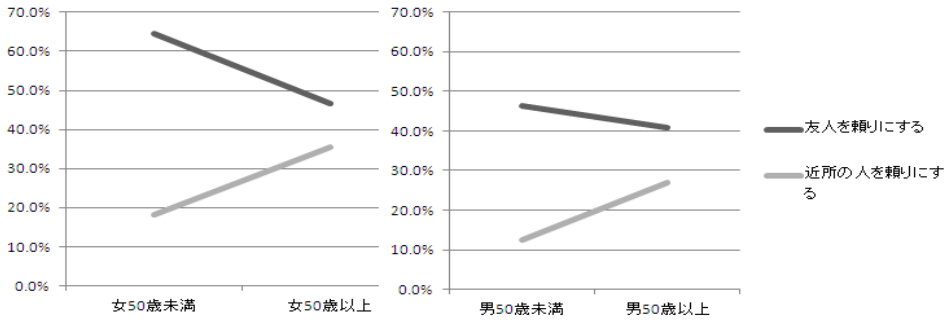

図 5

また、先の問いとおなじように、居住地域の影響も考えられるので、居住地域で層別して、年代とのクロス表を作成した（表 8）。結果は以下の通り。

表 8　居住地区×年代×問 3 のクロス表

				友人・知人を頼りにするか			
居住地区				頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
旧唐津	年代	50 歳未満	度数	55	28	7	90
			%	61.1%	31.1%	7.8%	100.0%
		50 歳以上	度数	66	76	23	165
			%	40.0%	46.1%	13.9%	100.0%
	合計		度数	121	104	30	255
			%	47.5%	40.8%	11.8%	100.0%
旧町村	年代	50 歳未満	度数	24	18	6	48
			%	50.0%	37.5%	12.5%	100.0%
		50 歳以上	度数	56	42	12	110
			%	50.9%	38.2%	10.9%	100.0%
	合計		度数	80	60	18	158
			%	50.6%	38.0%	11.4%	100.0%

旧唐津：$\chi 2=10.54$, df=2, $p<.01$ ／ 旧町村：$\chi 2=0.84$, df=2, p=n.s

層別に見てみると、先の問 2 の傾向とは逆になっている。すなわち、旧唐津居住の人たちにおいては、年代で違いがあり、旧町村の人たちにおいては、年代で違いがみられない。

友人・知人を頼りにすると答えた割合が最も高かったのは、旧唐津居住の 50 歳未満の世代で、61.1%であった。

先の表 3 と比べてみると、旧町村居住の 50 歳以上の世代では、困ったときに近所の人と友人・知人を頼りにすると回答したのは、約 50%で同じぐらいの割合であった。このグループと比べると他のグループでは、信頼すると回答した割合は大きく増え、信頼しないと回答した割合は大きく減少している。

このようにみてくると、困ったときに近所の人を頼る人の割合が最も多いのは旧町村居住の 50 歳以上の世代であるということ、そしてそれ以外のグループ、特に若い世代では、困ったときに友人を頼る傾向があるということがいえそうである。

最後に、問 2 との関係をみてみよう。問 2 と問 3 とのクロス表を作成し、行百分率だけではなく、総和の百分率も示す（表 9）。

表 9　問 2×問 3 のクロス表

			友人・知人を頼りにする			
			頼りにする	場合による	頼りにしない	合計
近所の人を	頼りにする	度数	79	29	3	111
		行%	71.2%	26.1%	2.7%	100%
		総和 %	18.8%	6.9%	0.7%	26.4%
	場合による	度数	86	94	12	192
		行%	44.8%	49.0%	6.3%	100%
		総和 %	20.4%	22.3%	2.9%	45.6%
	頼りにしない	度数	40	43	35	118
		行%	33.9%	36.4%	29.7%	100%
		総和%	9.5%	10.2%	8.3%	28.0%
合計		度数	205	166	50	421
		行%	48.7%	39.4%	11.9%	100%
		総和 %	48.7%	39.4%	11.9%	100%

$\chi 2=71.50$, df=4, $p<.01$

総和の百分率の値が最も高いのは、問 2「場合による」×問 3「場合による」の 22.3%であり、次に問 2「場合による」×問 3「頼りにする」の 20.4%、その次に問 2「頼りにする」×問 3「頼りにする」の 18.8%であった。行百分率をみると、近所の人を頼りにすると回答した人の 71.2%が、友人・知人を頼りにすると回答している。

また、問 2「頼りにしない」×問 3「頼りにしない」は、総和の百分率で 8.3%であった。全体の 1 割程度の人たちが、近所の人も友人・知人も頼りにしないと答えている。市民の 1 割程度の人たちが、他人との繋がり、具体的には「相互に扶助する関係」を築けていないということが推察される。

◆【問 4】「近所の人との付き合いについて」

他人との付き合いについて、全体的な結果をみておこう。

最も多かったのが、「日常的に立ち話をする程度の付き合いはしている」の 46.1%である。以下、選択肢の順に結果を述べていくと、「あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない」が 32.5%、「生活面で協力しあっている人もいる」が 19.2%、「付き合いはまったくしていない」が 2.1%となっている。

この質問について、詳しく見てみよう。

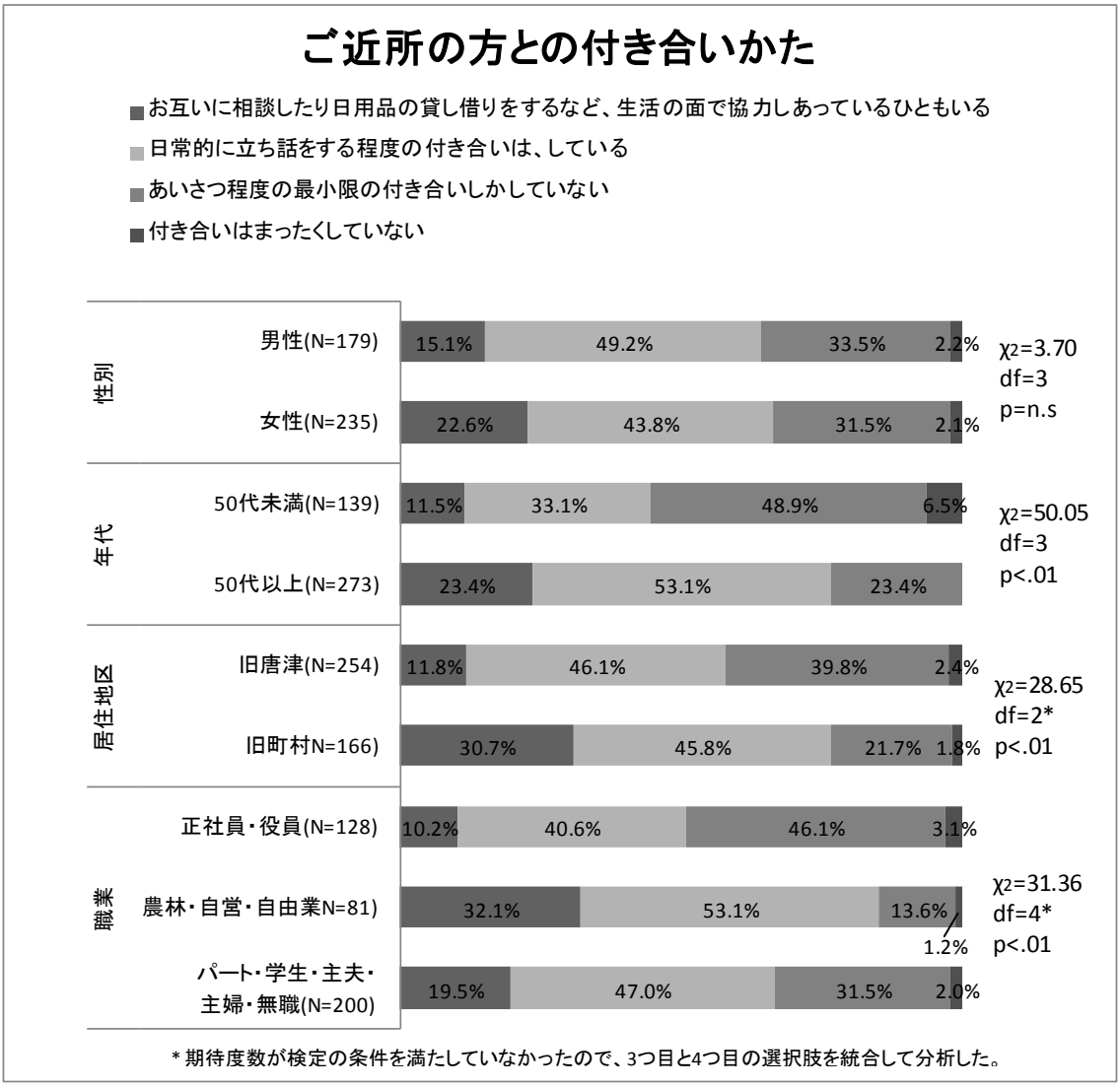

図 6

X 二乗検定の結果をみると、年代、居住地区、職業に有意差がでた。ご近所との付き合いかたについては、それらの要素が影響を与えているようである。

年代別の結果をみると、50 歳未満の世代において、生活面で協力しあっている人もいると答えたのは、11.5%、立ち話をする程度の付き合いをしていると答えたのは、33.1%、最小限の付き合いしかしていないと答えたのは、約半数の 48.9%、まったくしていないと答えたのは 6.5%だった。50 歳以上の世代では、生活面で協力しあっている人もいると答えたのは、23.4%、立ち話をする程度の付き合いをしていると答えたのは、半数を超える

53.1%、最小限の付き合いしかしていないと答えたのは 23.4%であった。やはり、若い世代と比べると、50 代以上の世代のほうが、近所の人たちとの付き合い方が深くなっているといえる。

なお、問 2 と同様に、問 4 について居住年数の影響を確認するために、多重クロス表を作成しχ二乗検定をおこなってみたが、検定の条件を満たしていなかった。あくまで参考という形で結果を述べておけば、50 代未満、50 歳以上それぞれについて、居住年数別の影響は見られなかった。

居住地区別でみると、旧唐津市に居住している人では、選択肢の順番で数字をあげると、11.8%、46.1%、39.8%、2.4%、一方旧町村に居住している人ではそれぞれ、30.7%、45.8%、21.7%、1.8%であった。地区別でみると、生活面で協力している人もいると答えた人の割合は、20 ポイント近くの差がある。

職業別にみてみると、正社員・役員の人では、選択肢の順番で数字を上げると、10.2%、40.6%、46.1%、3.1%。同様に、農林業・自営・自由業では、32.1%、53.1%、13.6%、1.2%、パート・学生・主夫・主婦・無職では、19.5%、47.0%、31.5%、2.0%であった。正社員・役員の半数近くの人が、最小限度の付き合いしかしていない、もしくは付き合いがないと答えている。

この質問にかんしては、地縁活動と関係があると考えられる。これについて問 9 とのクロス表を作成した（図 7）。

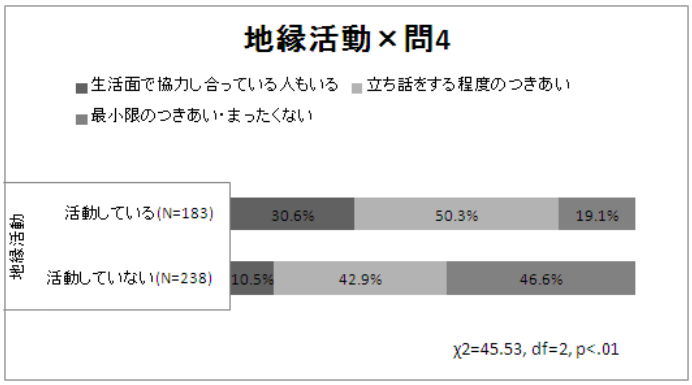

図 7

すぐにわかるように、地縁活動をしている人とそうでない人で回答の傾向は異なっている。地縁活動をおこなっている人と、そうでない人では、生活面で協力している人もいると回答した割合として、20 ポイントもの差がある。地縁活動をしていないと回答した人のなかの半数近くは、近所の人たちと最小限の付き合いしかしていないようである。この点について、年代を層別して、違いがあるかどうかをしらべてみたが、50 歳未満の世代でも 50 以上の世代でも、地縁活動をしているグループのほうが近所の人との付き合いのありかたは深いということがわかった。年代に関係なく、地縁活動をしている人たちのほうが近所の人たちと深い付き合いをしているようである。

問 4 について、もう少し細かくみてみよう。ここでは、性別と年代で層別し、年代とのクロス表を作成した。性別・年代それぞれの層で、50 歳以上の世代のほうが近所づきあいの深い人たちの割合が高く、50 歳未満の世代において近所づきあいの浅い人たちの割合が高くなっている。

近所づきあいの浅い人たちに注目して図を考えると、50 歳未満の世代の半数程度の人たちは、近所の人と浅い付き合いしかしていないということが示されている。また、50 歳以上の世代についてみると、全体として 3 割程度の人たちが近所の人たちと浅い付き合いし

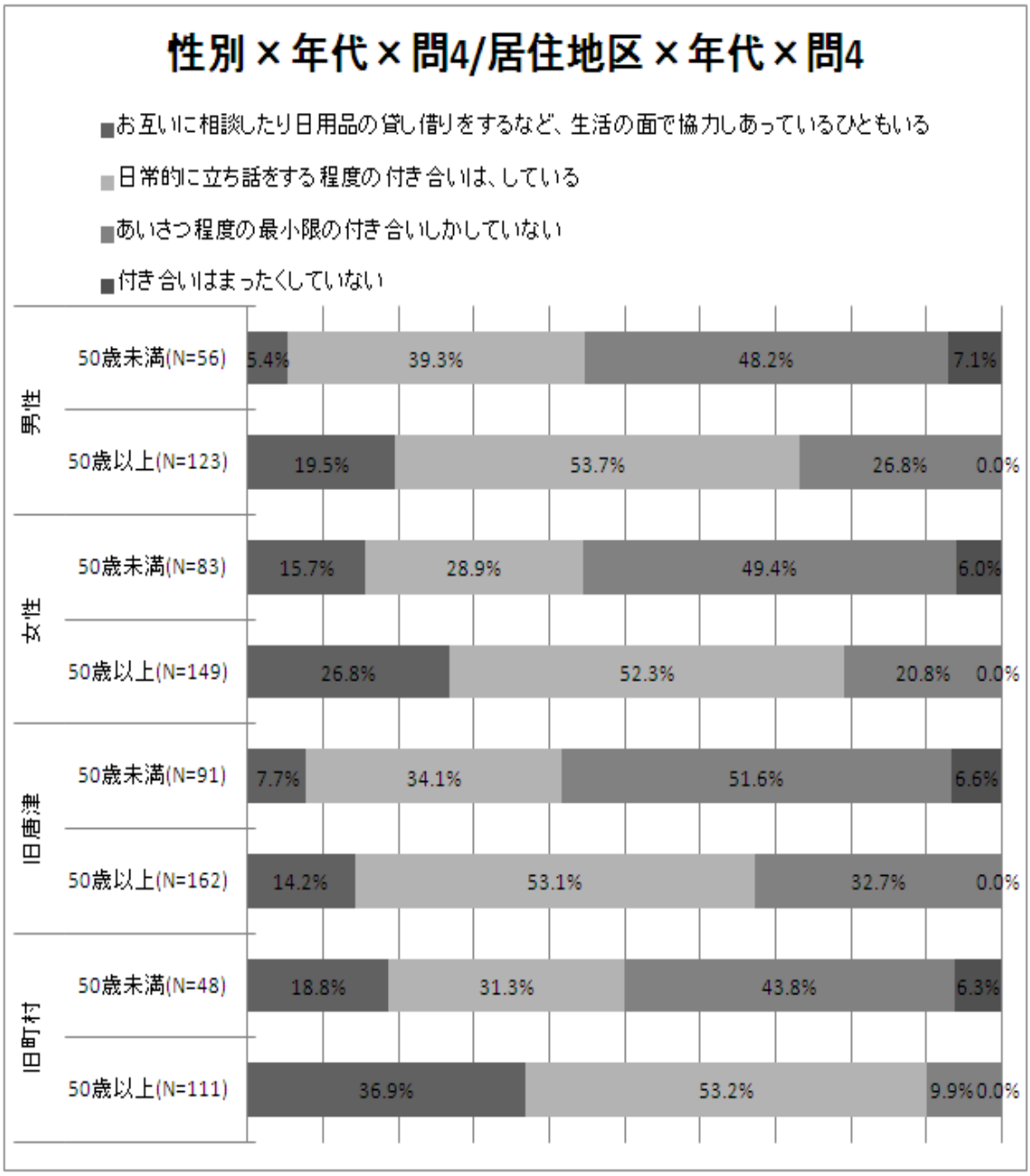

図 8

かしていない。居住地区別でみると、旧唐津居住の 50 歳以上の世代では約 3 割、旧町村居住の同じ世代では約 1 割の人たちが、浅い付き合いしかしていないようである。この数字は、「近所の人から孤立している人、またはそうした危険性のある人」の割合とも解釈できる。この点については、次の問と絡めて述べる。

なお参考に、2005 年の日本総研の調査結果を示しておく（表 9）。本調査と比べると、違いは明瞭である。例えば、「生活面で協力しあっている人もいる」についていえば、本調査では女性が 22.6%、日本総研の調査では 9.9%となっている。他の選択肢についても大きな違いがみられる。

また、2007 年の日本総研の調査の年代別の結果を示しておく（表 10）。本調査と比べてみると、50 歳未満の世代ではそんなに大きな違いはない。しかし 50 歳以上の世代をみる

と違いがみえる。

表 9　性別×近所の人との付き合い（日本総研調査）

	お互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活の面で協力しあっているひともいる	日常的に立ち話をする程度の付き合いは、している	あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない	付き合いはまったくしていない
男性	6.9%	29.4%	57.3%	6.5%
女性	9.9%	27.8%	56.5%	5.8%

日本総研（2005）より作成

表 10　年代×近所の人との付き合い（日本総研調査）

	お互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活の面で協力しあっているひともいる	日常的に立ち話をする程度の付き合いは、している	あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない	付き合いはまったくしていない
50 歳未満	8.5%	30.6%	53.3%	7.6%
50 歳以上	14.5%	41.5%	42.3%	1.7%

日本総研（2008）より作成

◆【問 5】「近所の人のどれくらいの人と交流しているか」

どれくらいの近所の人と付き合いがあるのかということを聞いた。全体の結果を記しておくと、「近所のかなり多くの人と面識・交流がある（おおむね 20 人以上）」が 18.6%、「ある程度の人と面識・交流がある（おおむね 5～19 人）」が 44.3%、「近所のごく少数の人とだけと面識・交流がある（おおむね 4 人以下）」が 34.9%、「隣の人がだれかもしらない」が 2.1%である。

この質問項目について詳しくみてみよう（図 9）。

性別、年代、居住地区、職業のすべてにおいて有意差があった。

性別をみると、男性においては、「おおむね 20 人以上」が 24.6%、「おおむね 5~19 人」が 41.9%、「おおむね 4 人以下」が 30.7%、「隣の人がだれかもしらない」が 2.8%、女性では、選択肢順に、13.4%、46.2%、38.7%、1.7%という結果となった。女性より男性の方が近所の人と付き合っている数は多いという結果がでている。

参考のデータとして、日本総研の 2007 年の調査の結果を示すと、同じ質問について男性は、20 人以上と答えたのは 7.7%、4~19 人と答えたのは 37.6%、4 人以下と答えたのは 44.5%、隣の人がだれかもしらないと答えたのは、10.1%、一方女性では順に、5.6%、39.5%、45.6%、9.3%であった。日本総研の調査では、男女において 10%水準で有意差がみられる。

この全国調査とくらべてみると、今回の調査において 20 人以上と答えた人の割合が男性　24.6%、女性 13.4%となっているのは、特徴的といえるだろう。

年代別でみてみると、20 人以上と答えた人の割合は、50 代未満が 12.9%であるのにたいして、50 歳以上では 21.0%となっている。また、5～19 人と答えた人の割合は、50 代未

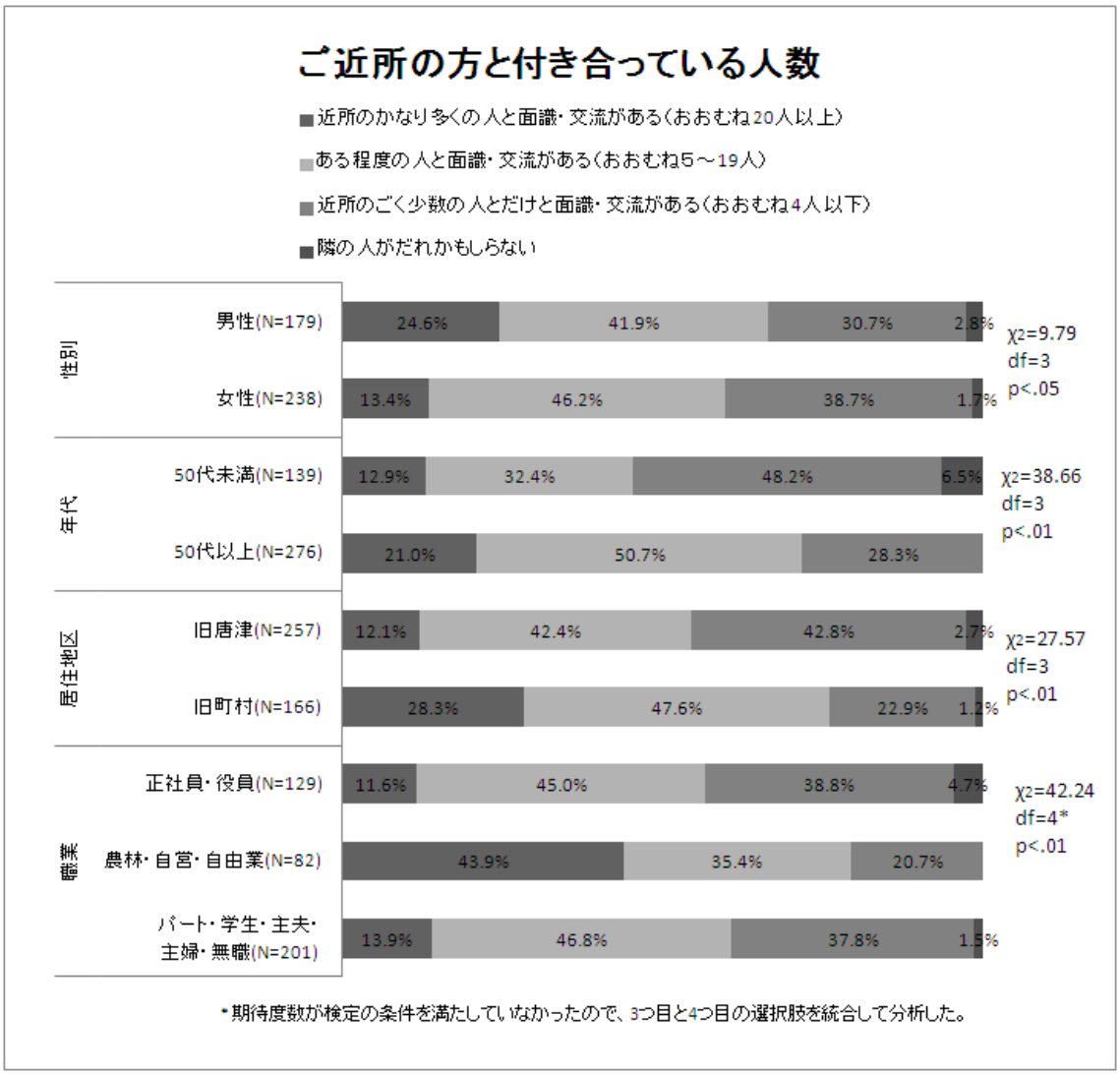

図 9

満で 32.4%、50 歳以上で 50.7%となっている。やはり、若い世代の層より、高い年齢層のほうが近所の人と付き合っている人の数は多いようである。日本総研のデータを示しておくと、50 歳未満では、選択肢順に 5.6%、34.5%、48.2%、11.6%、50 歳以上では、同様に 10.6%、43.0%、43.6%、2.8%である。

居住地区でみてみると、旧唐津では、選択肢順に 12.1%、42.4%、42.8%、2.7%、旧町村では、28.3%、47.6%、22.9%、1.2%であった。旧町村に住んでいる人の方が、旧唐津の人とくらべて、近所の人と付き合っている人の数は多い。

職業別でみると、20 人以上と答えた人の割合が一番高かったのは、農林・自営・自由業の人たちであった（43.9%）。それにたいして、正社員・役員の人たちのなかで 11.6%の人しか 20 人以上と答えていない。

近所の人と付き合っている人数が少ないグループをみると、50 歳未満の世代、居住地区が旧唐津、正社員という結果となっている。これらについてもう少し詳しくみてみよう。ここでは、性別・居住地区で層別し、年代別でクロス表を作成した（図 10）。

近所の人と付き合をしている相手の少ないグループは男性・女性の 50 歳未満の世代、

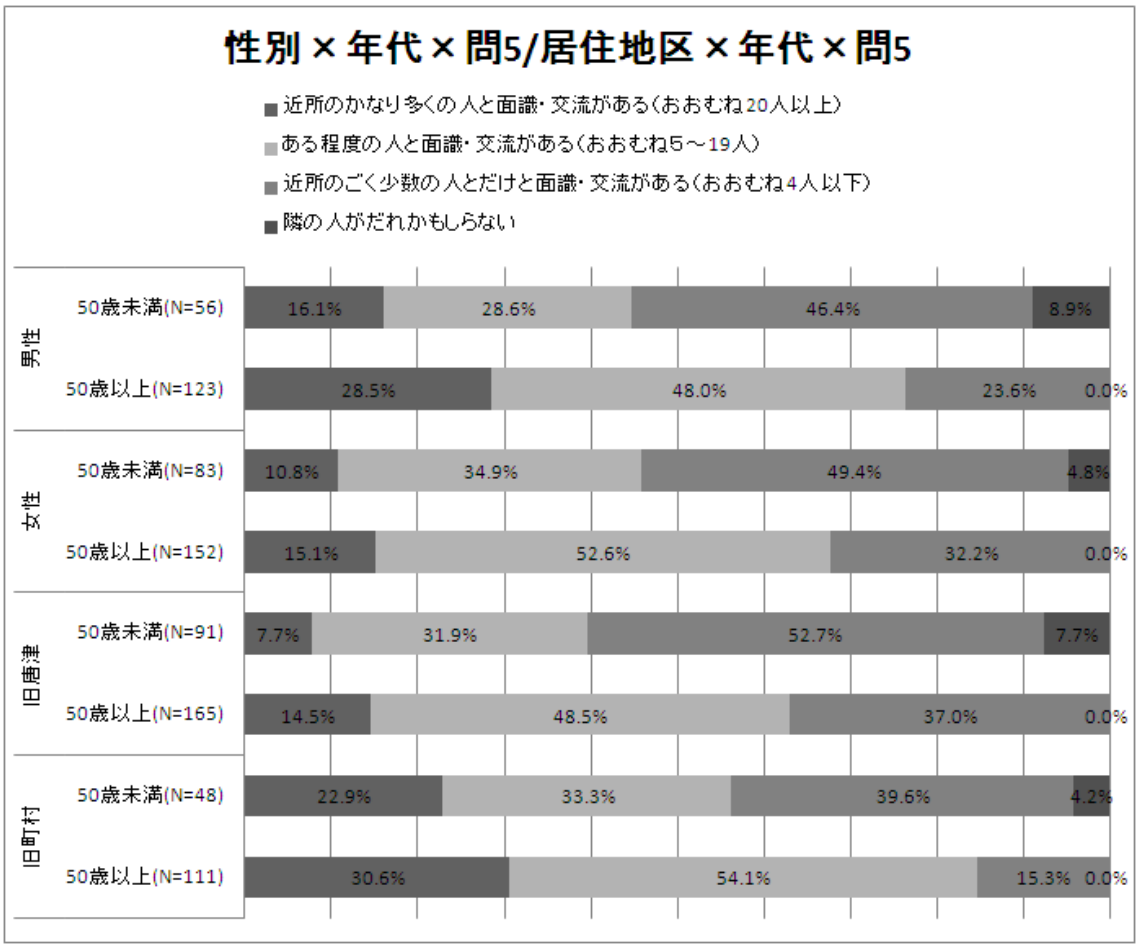

図 10

旧唐津に居住する 50 歳未満の世代。旧町村に住む 50 歳未満の世代は、他のグループの同じ世代と比べて、比較的に割合は少ない。各層の 50 歳以上の世代をみてみると、近所づきあいの相手の少ない人たちはだいたい 2 割から 3 割程度である。旧町村居住の 50 歳以上の世代において、その割合がもっとも少ない（15.3%）。

ここで問 4 を絡めて、「近所の人たちから孤立しがちな人」がどれぐらいいるのかを調べてみる。この点について、年代で層別して、問 4 と問 5 のクロス表を作成した。問 4 と問 5 を組み合わせることによって、つまり、近所づきあいの深さと人数とを調べることで、どれくらいの人が近所の人たちから孤立しているのかを調べてみる。結果は、表 11 の通り。なお、選択肢は統合してある。表中の百分率は、総和のパーセントである。

まず、一番下の合計のところをみてみよう。問 4 に「最小限の付き合いしかしていない・まったくない」と答え、問 5 に「4 人以下・隣がだれかもしらない」と答えたのは、全体の 25.0%であった。全体の 25%の人が、近所の人から孤立する危険性があると解釈できる。この数字を詳しく見てみると、50 歳未満の世代では 43.2%がその危険性があり、50 歳以上の世代では 15.8%がその危険性がある。短期的には、50 歳以上の世代の 15.8%という数字にたいして、なにかしらの対策を考えなければならない。長期的にいえば、50 歳未満の世代の 43.2%という数字は、将来的に地域の大きな問題として現れてくると思われる。

表 11 年代×問 4×問 5 のクロス表

年代				問 5			
				20 人以上	4~19 人	4 人以下・付き合いなし	合計
50 歳未満	問 4	生活面で協力し合っているひともいる	度数	7	6	3	16
			総和の %	5.0%	4.3%	2.2%	11.5%
		立ち話をする	度数	8	25	13	46
			総和の %	5.8%	18.0%	9.4%	33.1%
		最小限の付き合い・まったくない	度数	3	14	60	77
			総和の %	2.2%	10.1%	43.2%	55.4%
	合計		度数	18	45	76	139
			総和の %	12.9%	32.4%	54.7%	100.0%
50 歳以上	問 4	生活面で協力し合っているひともいる	度数	30	27	7	64
			総和の %	11.0%	9.9%	2.6%	23.4%
		立ち話をする	度数	25	93	27	145
			総和の %	9.2%	34.1%	9.9%	53.1%
		最小限の付き合い・まったくない	度数	1	20	43	64
			総和の %	0.4%	7.3%	15.8%	23.4%
	合計		度数	56	140	77	273
			総和の %	20.5%	51.3%	28.2%	100.0%
合計	問 4	生活面で協力し合っているひともいる	度数	37	33	10	80
			総和の %	9.0%	8.0%	2.4%	19.4%
		立ち話をする	度数	33	118	40	191
			総和の %	8.0%	28.6%	9.7%	46.4%
		最小限の付き合い・まったくない	度数	4	34	103	141
			総和の %	1.0%	8.3%	25.0%	34.2%
	合計		度数	74	185	153	412
			総和の %	18.0%	44.9%	37.1%	100.0%

なお、結果だけを示すが、居住地区別でみてみると、旧唐津地区居住で孤立する危険性のある回答をしたのは 31.9%、旧町村地区居住では 15.1%であった。さらに、50 歳以上の世代について詳しく見ていくと、50 歳以上の世代で旧唐津地区に居住している人のなかの 23.5%が近所の人から孤立する危険性があり、50 歳以上の世代で旧町村地区に居住している人の 4.5%の人がその危険性がある。

以上のことからいえるのは、短期的にみれば、唐津地区居住の 50 歳以上の世代で近所の人から孤立する危険性のある人たちにたいして、なにかしらのアプローチをかける必要があるということである。また、長期的な観点から考えると、居住地区にかかわらず、50

歳未満の世代の近所の人から孤立するというリスクの存在を指摘することができるだろう。

これまでと同様に参考として、日本総研の調査の結果を示しておく。

表 12　近所付き合いの人数（日本総研調査）

	近所のかなり多くの人と面識・交流がある（おおむね 20 人以上）	ある程度の人と面識・交流がある（おおむね 5～19 人）	近所のごく少数の人とだけと面識・交流がある（おおむね 4 人以下）	隣の人がだれかもしらない
男性	7.7%	37.6%	44.5%	10.1%
女性	5.6%	39.5%	45.6%	9.3%
50 歳未満	5.5%	36.4%	46.9%	11.3%
50 歳以上	11.7%	47.7%	37.5%	3.1%

日本総研（2008）より作成

◆【問 6】「友人・知人との付き合いの程度」

友人・知人関係についてみてみよう。全体の結果は次のとおりである。「日常的にある（毎日~週に数回程度）」は 13.5%、「ある程度頻繁にある（週に 1 回~月に数回程度）」は 36.6%、「ときどきある（月に 1 回~年に数回程度）」は 36.9%、「めったにない（年に一回~数年に一回）」は 12.5%、「全くない（友人・知人）はいない」は 0.9%であった。

では、この結果の内実をみてみよう。

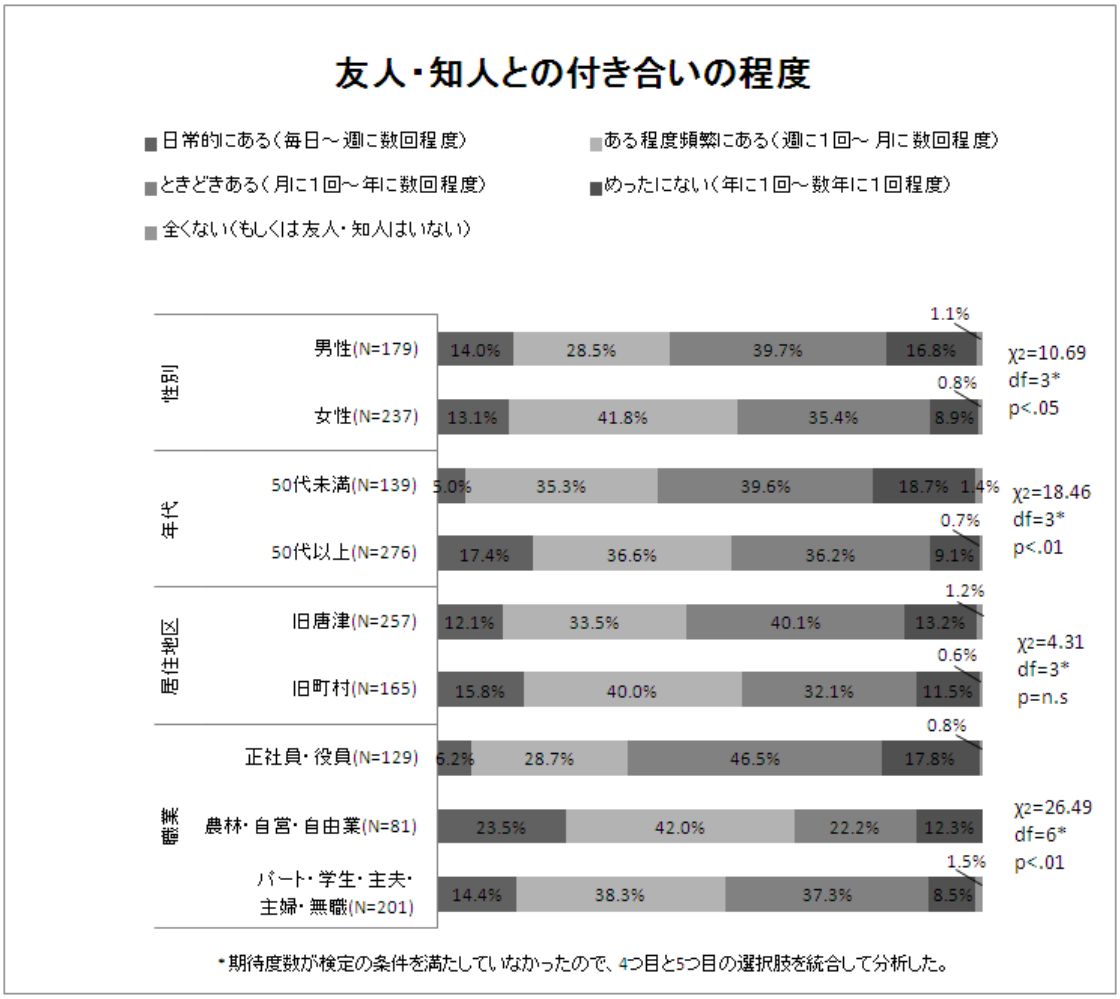

図 11

有意差がみられたのは、性別、年代、職業である。

性別でみてみると、男性では、日常的にあるは 14.0%、ある程度の頻度であるは、28.5%、ときどきあるは、39.7%、めったにないは 16.8%、全くないは 1.1%。女性をみると、選択肢順に、13.1%、41.8%、35.4%、8.9%。0.8%であった。図をみると、女性のほうが頻繁にあっているようである。

年代別をみてみると、50 歳未満では、選択肢順に、5.0%、35.3%、39.6%、18.7%、1.4%、同様に 50 歳以上では、17.4%、36.6%、36.2%、9.1%、0.7%であった。50 歳未満と 50 歳以上を比較すると、日常的にある答えた人の割合が 10 ポイント以上異なってお

り、また、めったにないと答えた人の割合が 10 ポイント近く離れている。

居住地区をみてみると、旧唐津と旧町村では、ほぼ同じような傾向がみられる。

職業別でみてみると、日常的にあると答えた割合が一番多かったのは、農林・自営・自由業であった（23.5%）。正社員・役員の半数近くの人が、ときどきあると答えている。

近所の人たちとの付き合いと友人・知人との付き合いが関連しているかを確認するために、問 5 と問 6 とのクロス表を作成した。ここでは、選択肢は統合し、行百分率と総和の百分率を示してある。

表 13　　問 5×問 6 のクロス表

			友人・知人との付き合い				
			日常的にある	ある程度頻繁にある	ときどきある	めったにない・全くない	合計
近所付き合い	20 人以上	度数	26	39	13	1	79
		行の %	32.9%	49.4%	16.5%	1.3%	100.0%
		総和の %	6.1%	9.2%	3.1%	0.2%	18.7%
	4～19 人	度数	20	74	77	17	188
		行の %	10.6%	39.4%	41.0%	9.0%	100.0%
		総和の %	4.7%	17.5%	18.2%	4.0%	44.4%
	4 人以下・隣の人が誰かも知らない	度数	11	40	66	39	156
		行 の %	7.1%	25.6%	42.3%	25.0%	100.0%
		総和の %	2.6%	9.5%	15.6%	9.2%	36.9%
合計		度数	57	153	156	57	423
		行 の %	13.5%	36.2%	36.9%	13.5%	100.0%
		総和の %	13.5%	36.2%	36.9%	13.5%	100.0%

$\chi 2=75.50$, df=6, $p<.01$, $\gamma=.50$

この表をみると､近所付き合いをしている人の数と友人･知人とお付き合いは関連がある。近所づきあいのいい人ほど友人や知人との交流を積極的におこなっているようである。また、問 5 で「4 人以下・隣の人が誰かも知らない」と答え、問 6 で「めったにない・全くない」と答えたのは、全体の 9.2%であった。近所の人とのつながりや友人・知人とのつながりも希薄な人が約 1 割程度いるようである。

これまでと同様に参考として、日本総研の調査の結果を示しておく。本調査と比較すると、男性は同じような傾向を示している一方で、女性は少しの違いをみせている。

表 14　友人・知人との付き合い頻度（日本総研調査）

	日常にある	ある程度頻繁にある	ときどきある	めったにない	全くない
男性	11.3%	24.0%	38.2%	22.1%	4.4%
女性	15.1%	30.5%	39.2%	13.3%	1.9%
50 歳未満	13.2%	26.5%	38.9%	17.9%	3.5%
50 歳以上	13.1%	30.3%	38.0%	17.0%	1.5%

日本総研（2008）より作成

◆【問７】「親類・親戚との付き合いの頻度」

親戚・親類との付き合いについてみてみよう。全体の結果を示しておくと、「日常的にある」は 13.5%、「ある程度の頻繁にある」は 31.7%、「ときどきある」は 44.7%、「めったにない」は 9.0%、「全くない」は 1.2%であった。この問について詳しくみていく。

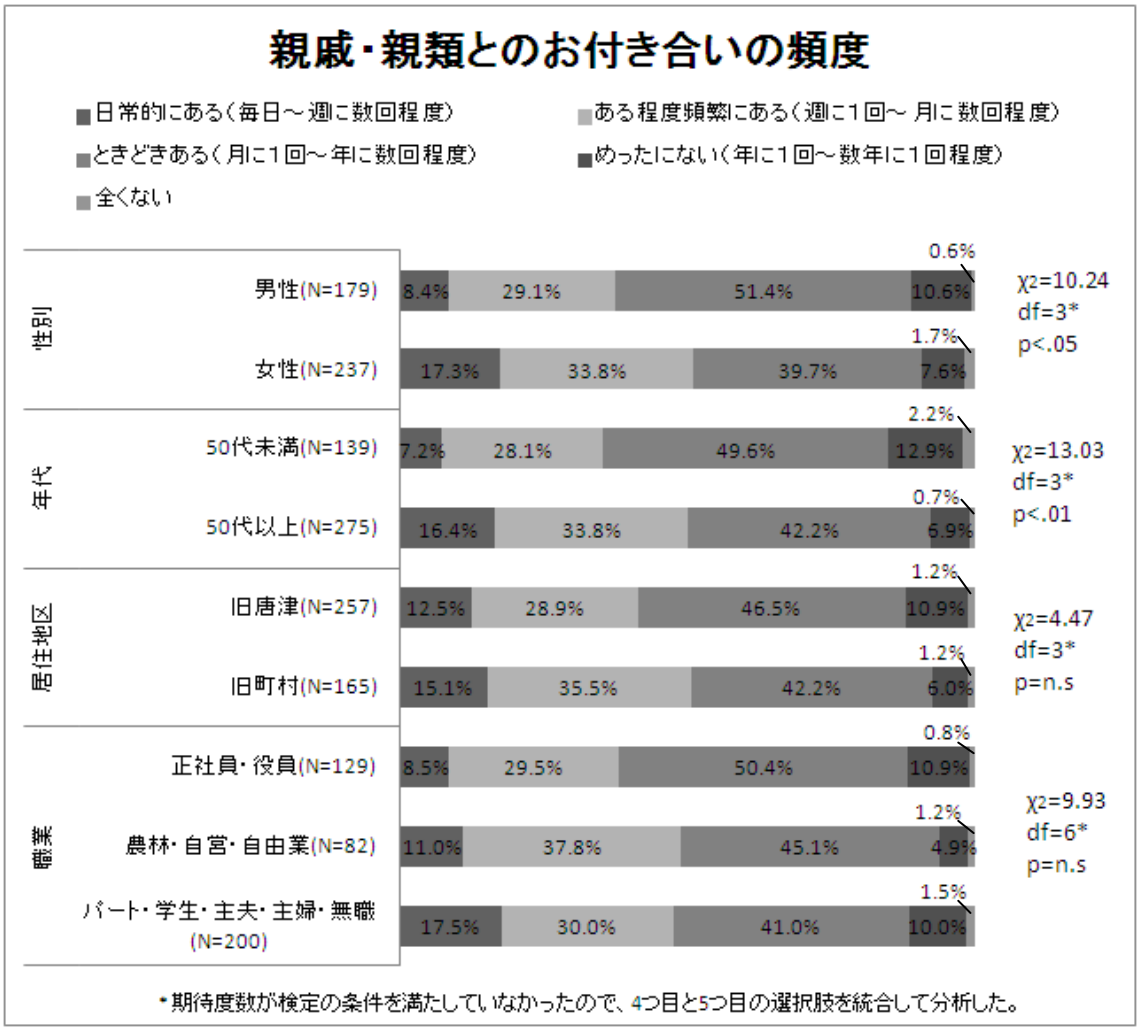

図 12

有意差がみられたのは、性別、年代であった。

性別をみてみると、男性では「日常的にある」と答えたのは、8.4%、「ある程度頻繁にある」と答えたのは、29.1%、「ときどきある」答えたのは 51.4%、「めったにない」と答えたのは 10.6%、「全くない」と答えたのは 0.6%であった。一方女性をみると、選択肢順に、17.3%、33.8%、39.7%、7.6%、1.7%であった。女性の方が男性と比べて、親戚・親類と近しいようである。先の日本総研の調査結果を参考に示しておくと、男性では選択肢順に、3.9%、15.1% 、47.7% 、30.5%、3.1%、同様に女性では、6.7%、19.2%、44.0%、28.0%、2.1%である（χ 二乗検定の結果は、1%水準で有意）。唐津の調査と比べると、全国調査では「めったにない」と答えた人の割合が多くなっている。こうした比較からすると、唐津市民は比較的に親戚・親類と付き合っている頻度は高いといえそうである。

年代別にみると、50 歳未満では選択肢順に、7.2%、28.1%、49.6%、12.9%、0.2%、50 歳以上では、16.4%、33.8%、42.2%、6.9%、0.7%。「日常的にある」と答えた人の割合は、50 歳以上が 50 以下未満より、約 10 ポイント高くなっている。50 歳以上の人の方が親戚・親類と近いようである。居住地区、職業において、有意差はみられなかった。

表 15　親戚・親類との付き合いの頻度（日本総研調査）

	日常にある	ある程度頻繁にある	ときどきある	めったにない	全くない
男性	3.9%	15.1%	47.4%	30.5%	3.1%
女性	6.7%	19.2%	45.3%	28.0%	2.1%
50 歳未満	5.2%	16.5%	45.1%	30.3%	3.0%
50 歳以上	5.5%	20.1%	48.4%	25.0%	1.0%

日本総研（2008）より作成

◆【問 8】「同僚と付き合いの頻度」

同僚との付き合いの頻度についてみてみよう。全体の結果を示しておくと、「日常的にある」は 5.4%、「ある程度の頻繁にある」は 18.6%%、「ときどきある」は 41.8%、「めったにない」は 17.1%、「全くない」は 17.1%であった。この問について詳しくみていく。この問については、アルバイト・パートを含めた職を持っていると答えた回答者を抽出して、分析をおこなった。

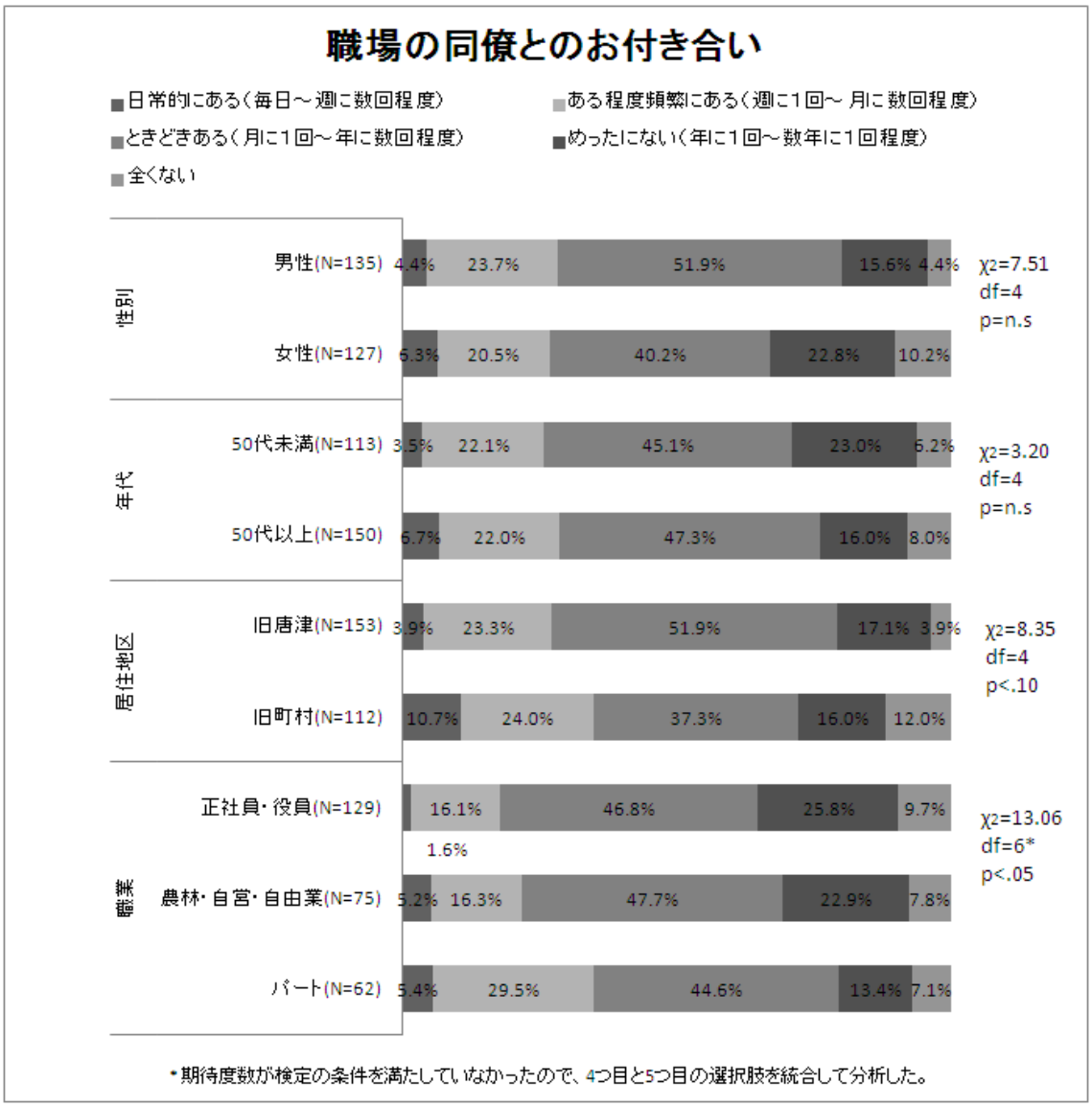

図 13

結果は図の通り。全体的にいえば、同僚との付き合いについては、「ときどきある」が最も多かった。有意差がみられたのは、職業であった。また、居住地区において 10%水準で有意差がみられた。

職業の層をみると、職場の同僚と付き合う頻度が高いのは、パートやアルバイトのグループであった。正社員・役員、農林・自営・自由業のグループにおいて、「日常的にある」

「ある程度頻繁にある」と答えた比率は、2 割前後であるが、パート・アルバイトでは、その比率が 3 割を超えている。パートやアルバイトをしている人は、時間に余裕があるためと考えられる。

参考に日本総研の調査結果を示しておく。まず性別を比べてみると、日本総研の調査の男性の回答傾向をみると、「ときどきある」が 40.1%なのにたいして、本調査では 51.9%となっている。「めったにない」についてみると、回答比率は逆転している。また女性の回答傾向をみてみると、日本総研の調査では「ときどきある」が 30.7%であるのにたいして、本調査では 40.2%となっている。年代別をみると、日本総研の調査では、「めったにない」「まったくない」と答えた割合は、本調査よりも大きくなっている。

表 16　同僚との付き合いの頻度（日本総研調査）

	日常にある	ある程度頻繁にある	ときどきある	めったにない	全くない
男性	7.0%	18.9%	40.1%	23.9%	10.0%
女性	4.6%	13.4%	30.7%	24.7%	26.6%
50 歳未満	5.5%	15.8%	35.6%	24.6%	18.6%
50 歳以上	7.2%	17.7%	34.6%	23.4%	17.0%

日本総研（2008）より作成

◆社会的活動への参加にかんして

社会的活動の活動状況についてみてみよう。全体的な傾向は、図にある通りである。地縁活動への参加の割合が最も多くなっている。ボランティア・NPO・市民活動、趣味的サークル活動、スポーツ活動は、2 割程度の人たちが参加していると回答している。団体活動については、1 割の人たちが活動していると回答している。参考に日本総研の調査結果を示しておくと、地縁活動に参加していると回答したのは 22%。ボランティア・NPO 活動に参加していると回答したのは 9%であった。なお、ボランティア・NPO 活動について、別の調査結果を示しておくと、2007 年度『国民生活選好度調査』では、ボランティアや NPO 活動に参加していると答えた人の割合は 18.5%だった。趣味的サークル活動とスポーツ活動については、日本総研の調査と本調査とでは、質問の仕方がことなっている。日本総研の調査では、本調査のように趣味的サークル活動とスポーツ活動を分けて聞いていない。それらの調査と比較するため、本質問を再集計してみた。本調査において、趣味的サークル活動またはスポーツ活動をすくなくともどちらか一方をおこなっている人の割合は、31.3%であった。日本総研の調査において活動していると回答したのは 36%であった。また、今言及した国民生活選好度調査では、31.9%であった。団体活動についていえば、日本総研の調査では 6%、国民生活選好度調査では 15.1%の人が活動していると回答している。

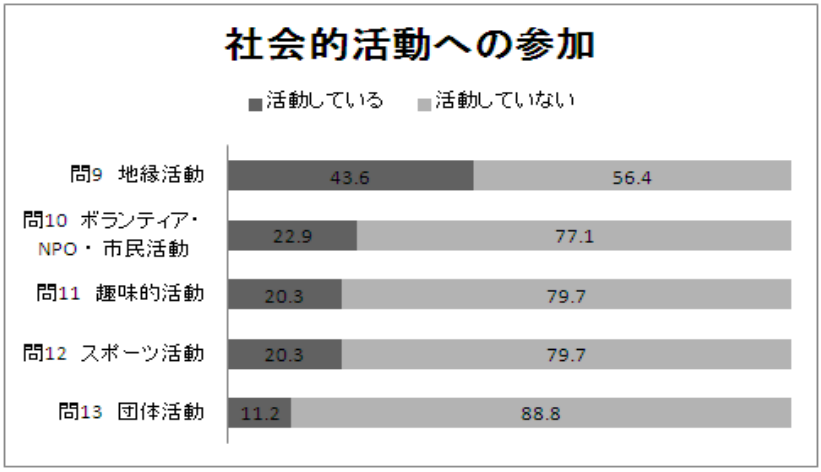

図 14

それでは、各質問について詳しくみていこう。

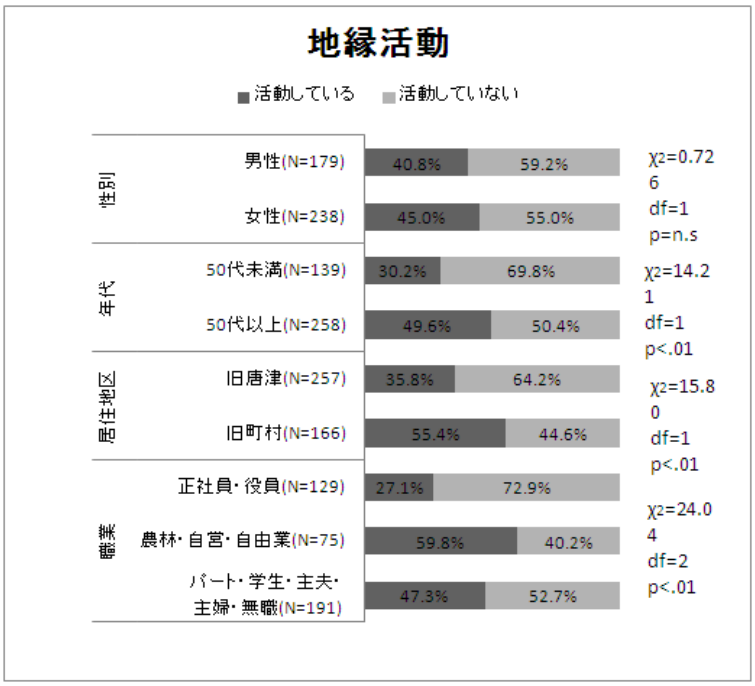

図 15

◆【問 9】「地縁活動」への参加

まず、地縁活動への参加についてである（図 15）。有意差が出ているのは、年代、居住地区、職業であった。

性別で、地域活動への参加状況には違いないようである。年代別でみてみると、やはり 50 歳以上の人たちが地縁活動に参加している割合が多いようである。居住地区でみてみると、旧町村のほうが旧唐津より参加している割合が多い。職業別にみてみると、活動していると答えた割合が多いのは、農林・自営・自由業のひとたちだった（59.8%）。それにたいし、正社員・役員の人たちで活動していると答えたのは約 3 割弱であった。

内実をみるために職業を層として、年代とのクロス表を作成した。正社員・役員をみると、50 歳未満の世代では 21.6%が、50 歳以上の世代では 35.2%が、活動していると答えている。これは、10%水準であるが有意となっている。農林・自営・自由業をみると、50 歳未満の世代も 50 歳以上の世代も 6 割前後が、活動していると回答している。ここには統計的な違いはみられない。

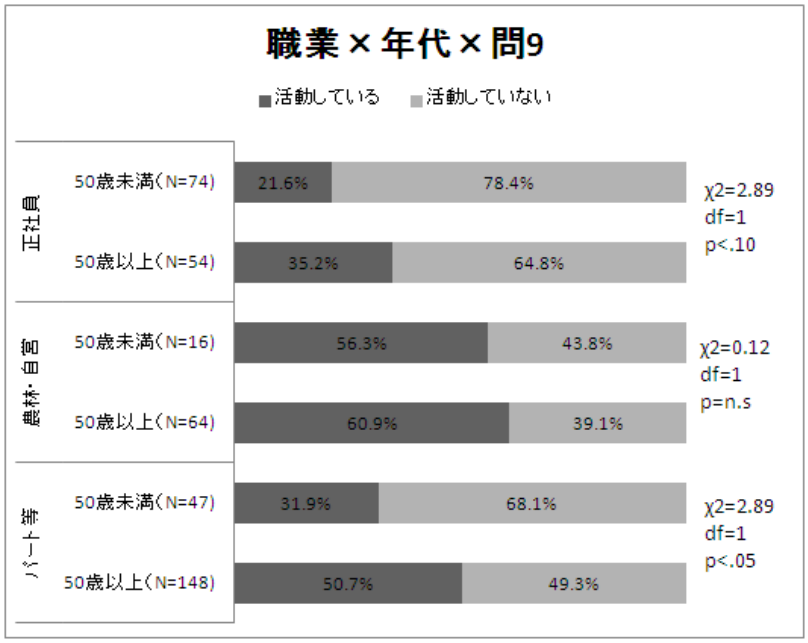

図 16

パート・学生・主夫等をみてみると、50 歳未満の世代では 31.9%、50 歳以上の世代では 50.7%が、活動していると答えている。これについては、5%水準で有意である。

地縁活動についていえば、農林・自営・自由業においては世代による違いはみられない。有意差 10%というのが微妙であるが、正社員・役員においては、世代による違いがみられるようだ。パート・主夫等においても、世代による違いがみられる。やはり 50 代以上の人たちの活動している割合が多くなっている。

なお、年代別に層別して、男女の違いをみてみたが、50 歳未満の世代においては男女とも 3 割前後が活動していると答え、50 以上の世代においては、男女とも 5 割前後が活動していると答えている。

農業・自営・自由業の人たちは年代に関係なく 5 割程度に人が地縁活動に参加しており、それ以外のグループでは、50 歳以上の世代に人たちが、そうでない世代と比べると参加する割合が高くなっている。これらの結果からいえるのは、あたりまえの指摘となってしまうが、被雇用者の自治会等への参加をいかに促していくのかということが重要な課題といえるだろう。

◆【問 10】「ボアランティア・NPO・市民活動」への参加

次に、ボランティア・NPO・市民活動への参加についてみてみよう。有意差があったのは、年代と職業であった。性別、居住地域では違いがみられないようである。

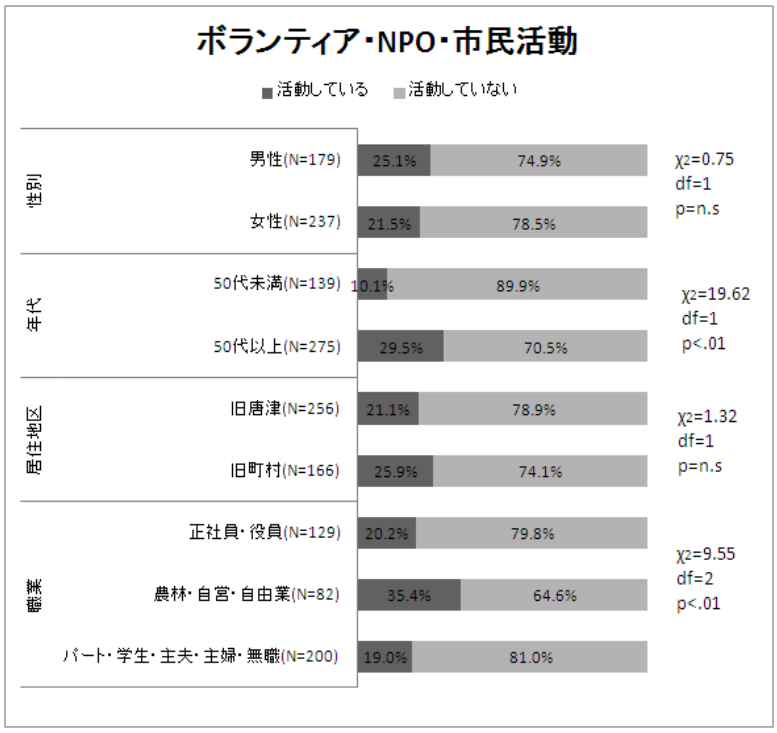

図 17

年代をみてみると、活動していると答えたのは 50 歳以上で 29.5%、50 歳以下では 20 ポイント近く下がって 10.1%であった。地縁活動とおなじように、年齢が高いとボランティアや NPO に参加する割合が高くなっている。

比較的都市化されている旧唐津ではボランティア・NPO 活動への参加が高いのではと考えられるが、結果をみるとそうではなかった。

職業別をみると、農林・自営・自由業の人たちの 35.4%の人が活動していると答えている。正社員とパート・学生・主婦他では、約 2 割の人たちが活動していると答えている。

内実を詳しく見るために、職業を層として年代のクロス表を作成した。正社員・役員の層をみると、ボランティア活動等へ参加していると答えたのは、50 歳以下の世代では 16.2%、50 歳以上の世代では 25.9%。9 ポイントほどの違いはあるが、検定の結果は、有意差はなかった。

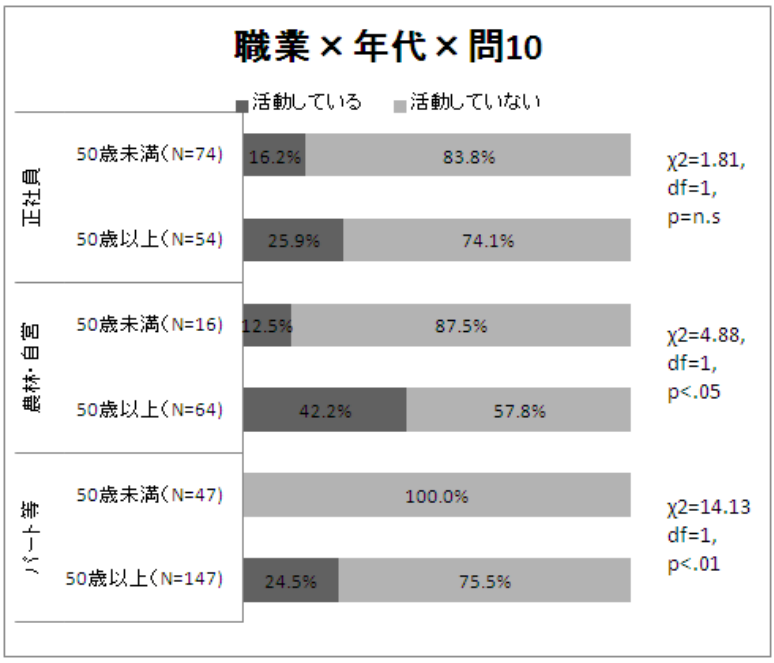

図 18

農林・自営・自由業の層をみると、50 歳未満の世代で活動していると答えたのは、12.5%、50 歳以上の世代では 42.2%。

パート・学生・主夫・主婦・無職の層をみると、活動していると答えたのは、50 歳未満の世代では 0%、50 歳以上の世代では 24.5%であった。なお、パート・主夫・主夫等で 50 歳未満の世代で活動していうるが 0 となっているのは、サンプルの少ないからと考えられる。

クロス表の結果からすると、唐津においてボランティア・NPO・市民活動を最も担っているのは、50 歳以上の世代の農林・自営・自由業の人たちということになっている。

なお、ボランティアなどの社会的活動については、労働時間との関係性が問われるだろう。この点についてみてみよう。職に就いている人にたいして、労働時間を聞いている。これについて、労働時間が 9 時間未満と 9 時間以上との二つのグループに分け、ボランティア等の活動状況にかんするクロス表を作成した。結果をみると、労働時間の違いによって参加率に違いはみられなかった。ちなみに、労働時間を 11 時間未満、11 時間以上というように分けても、違いはみられなかった。労働時間はこの活動に影響を与えていないといえる。

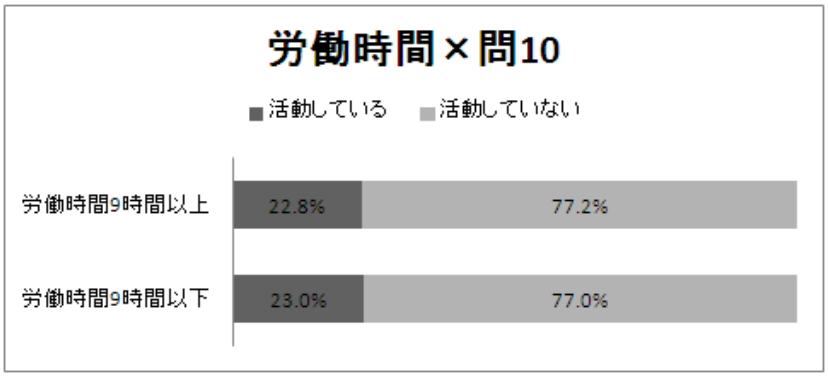

図 19

最後に、年代を層として性別とのクロス表を作成した。50 歳未満の世代においては、男女とも約 1 割の人たちが活動していると答えており、50 歳以上の世代においては、男女とも 3 割前後の人たちが活動していると答えている。

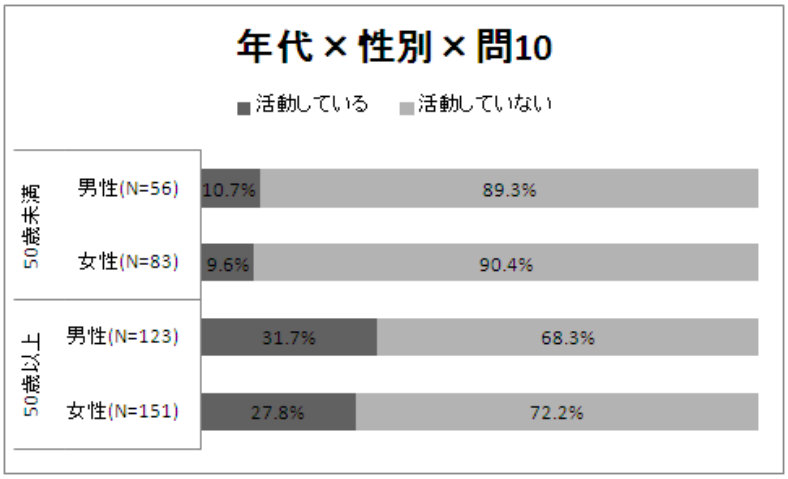

図 20

◆【問 11】「趣味的サークル活動」への参加

趣味的サークル活動をみてみよう。

有意差があったのは、性別と年代であった。居住地区と職業では違いがみられなかった。

性別をみると、男性の 15.1% 、女性の 24.8%が趣味的サークル活動に参加していると答えている。性別についていえば、地縁活動とボランティア活動では、男女の差は無かったが、サークル活動では違いがみられた。

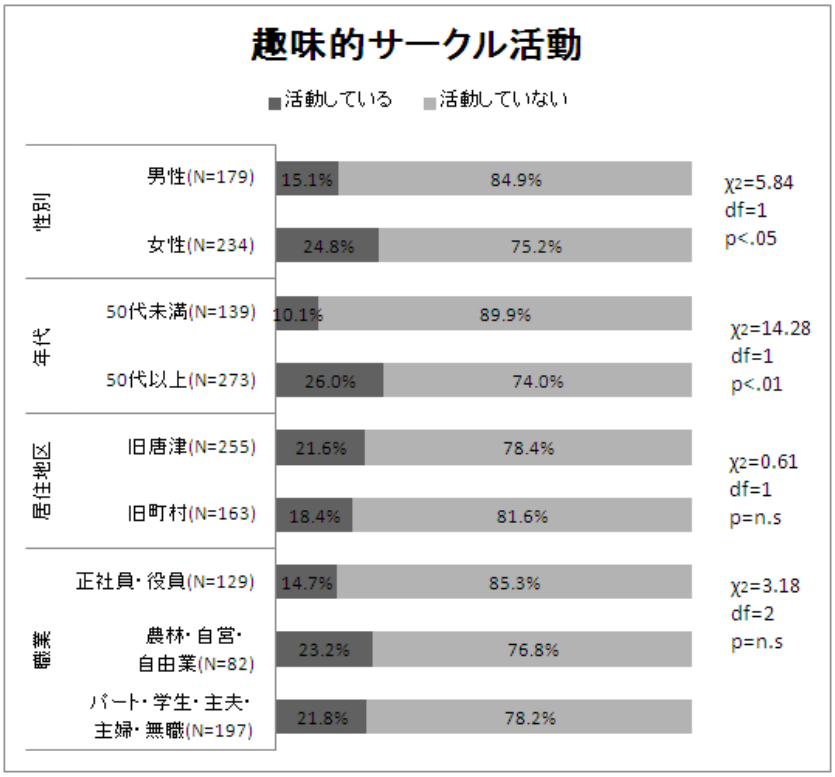

図 21

年代別でみてみると、50 歳以下の 10.1%、50 歳以上の 26.0%の人が活動していると答えている。

内実を詳しく見るために、年代を層として性別とのクロス表を作成した。結果をみると、50 歳以下の世代では、サークルの参加にかんして、男女の違いはみられなくなる（男性：8.9%、女性：10.8%）。しかし、50 歳以上の世代となると、男女の違いがでてくる。この世代においては、男性のサークルへの参加率は、17.9%となっており、女性のそれは 32.9%となっている（1%水準有意）。

活動していると答えた人の割合は、男性では 8.9%（50 歳未満）から 17.9%（50 歳以上）に、女性では 10.8%（50 歳未満）から 32.9%（50 歳以上）へと、それぞれ上昇しているようにみえる。検定をおこなってみると、男性では有意差はなく、女性では有意差がみられた。女性において、年代による違いがみられ、50 歳以上の世代で

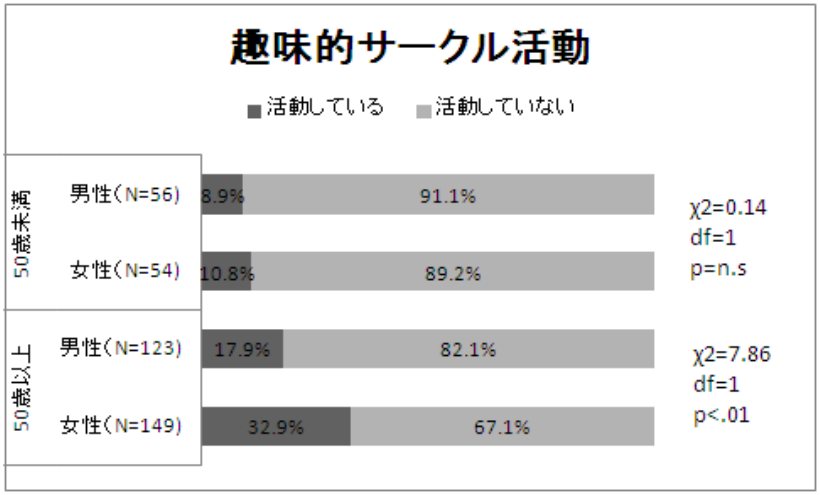

図 22

参加率が上がっている。子育てが一段落した世代であるがゆえに、上記の活動にも参加しやすくなっていると考えられる。また、男性の参加率が低いのは、女性の関心に偏ったサークルが多く、男性にとって関心・興味のあるサークルが少ない、近くにないといった理由も考えられる。

◆【問 12】「スポーツ活動」への参加

スポーツ活動についてみてみよう。

有意差がみられたのは、性別のみであった。やはり、男性の方が女性と比べてスポーツ活動に積極的といえるようだ。これは先の趣味的サークル活動と逆の傾向を示している。他の層をみるとほぼ 2 割前後の人がスポーツ活動に参加していると答えている。

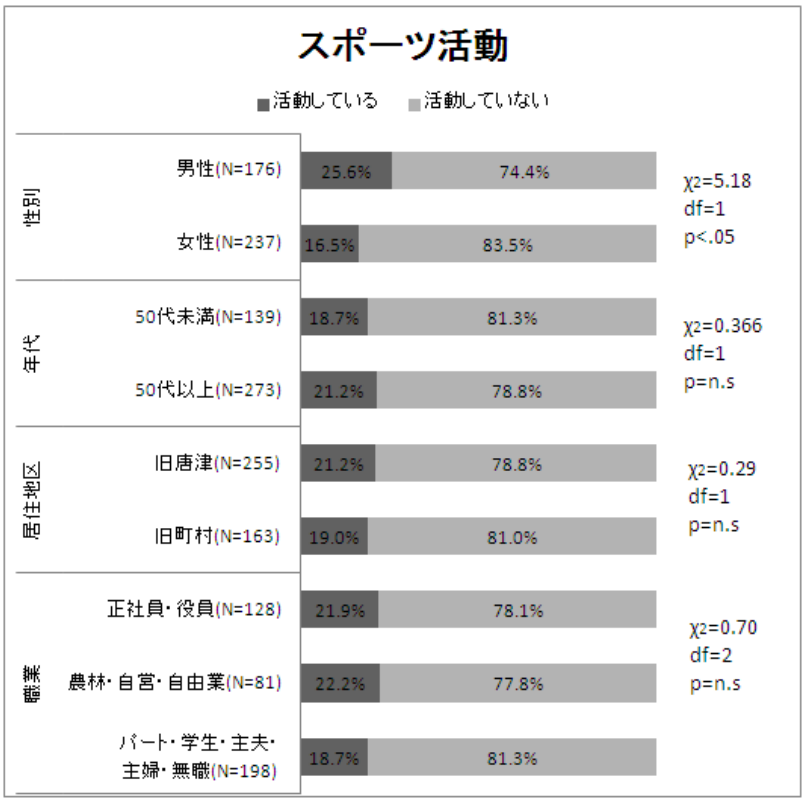

図 23

内実をみるために、性別で層別し年代とのクロス表を作成した。

結果をみると、男性の 50 歳未満の世代においてスポーツ活動について活動していると答えているのは、30.4%となっている。50 歳以上の世代をみると、23.3%となっている。減少しているように思えるが、統計的な差はない。一方女性のほうでは、50 歳未満の世代では活動していると回答したのが 10.8%、50 歳以上の世代では 19.7%であった。χ 二乗検定の結果は、10%水準有意であった。10%水準の有意差というのは微妙であるが、女性の 50 歳以上の世代はそれ以下の世代と比べてスポーツ活動に参加しているようである。こうした傾向は、一つ前の質問の趣味的サークル活動と同じような特徴を示している。

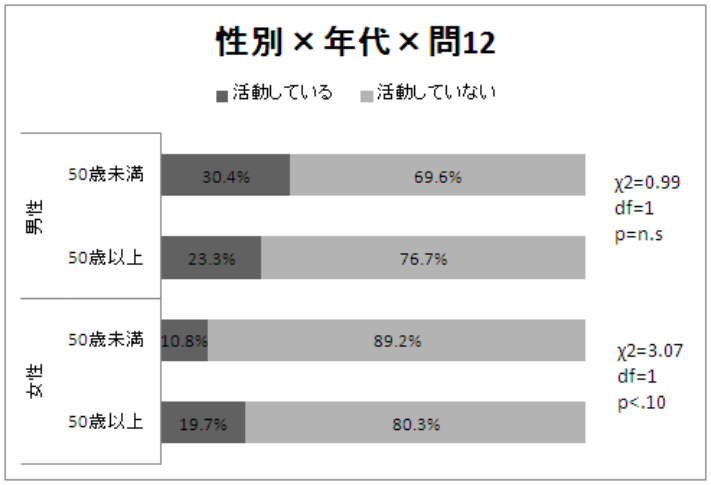

図 24

なお、労働時間との関係をみても、11 時間未満働く人と 11 時間以上働く人との間に、スポーツ活動への参加についての違いはみられなかった。

◆【問 13】「団体活動への参加」

団体活動への参加についてみてみよう。

結果をみてみると、性別・年代・居住地区においては、有意差はなく、職業で有意差があった。やはり、農林・自営・自由業の人たちの約 3 割が活動していると答えている。

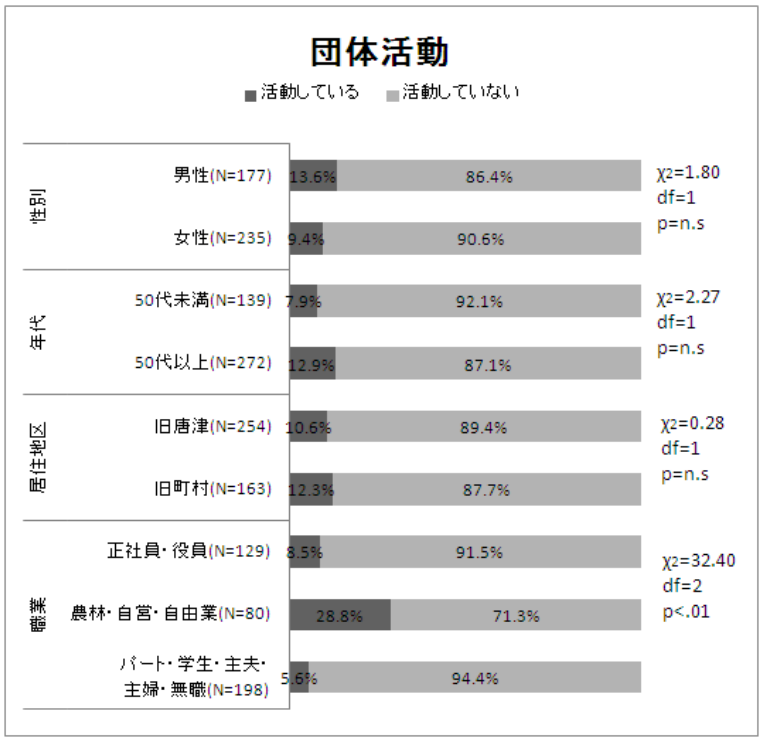

図 25

◆「社会的活動に参加できない理由」

今まで述べてきたような社会活動に参加できない理由を聞いている。結果は図の通り（図 26）。

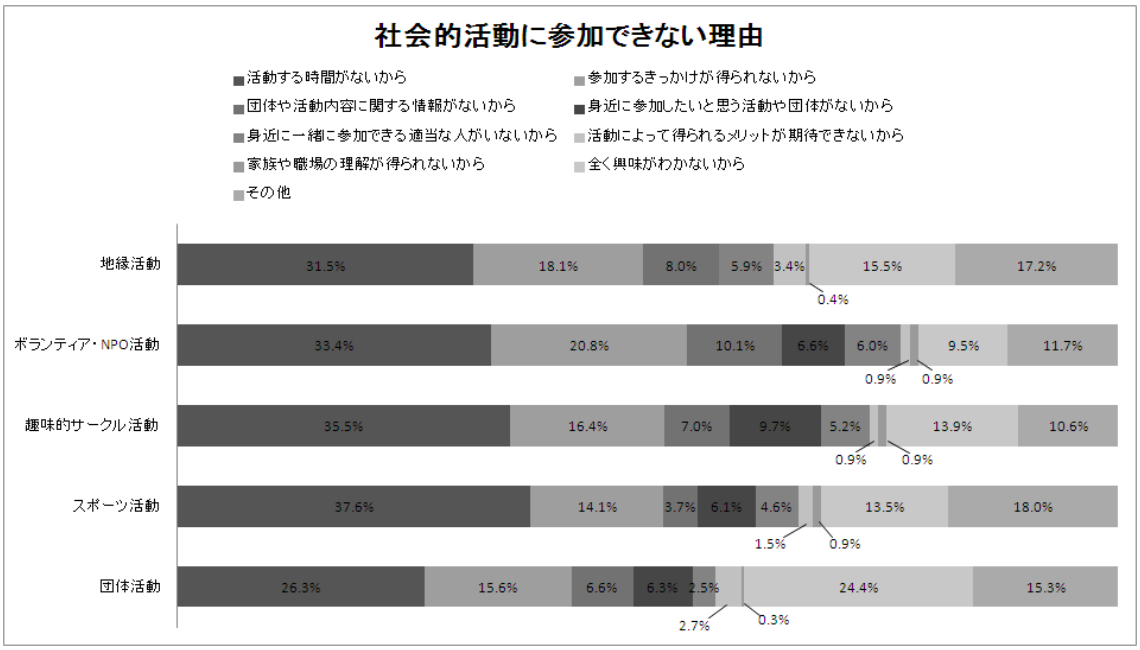

図 26

参加できない最大の理由は「活動する時間がないから」となっている。続いて、「参加する

きっかけが得られないから」「団体や活動内容に関する情報が少ないから」となっている。